チュチェ思想の原理解説２

人類の社会を明るく照らす
チュチェののろし



人類の社会を明るく照らす
チュチェののろし

朝鮮・平壌
外国文出版社
チュチェ103（2014）年

「チュチェ思想は歴史発展と社会革命の合法則性を明らかにした思想です。チュチェ思想によって、歴史を創造し発展させる勤労人民大衆の社会的運動、革命運動の根本原理がせん明されました」

金 正 日

はじめに

今日の世界には、自然と社会という大きな領域がある。

歴史上に自然と社会が並存してからもう200 万年。

振り返れば人類は社会のなかで、横暴な自然を改造し自分に奉仕させながらその生を繋いできた。

社会は人間にとって一刻も離れることのできない生の拠り所、生活の舞台であった。魚が水を離れて生きていけないように、小鳥が空気なしに飛べないように、人間は社会から離れて生きていけない。

人間の生が始まりそれを繋げてくれる生の拠り所がほかならぬ社会であるため、私たちは社会を貴重にし、美しく作り変えなければならないのである。

社会を人類の志向にふさわしく立派に作り変えるためには、その面貌を明らかにする偉大な思想理論が必要である。

人類社会の黎明期から長い間、社会と人類の前途を明らかにしようと多くの思想家たちが歴史の舞台に現れ、それぞれの思想と理論を打ち出したりした。しかし、人類は自分自身を歴史の主人として堂々と押し立てる真の思想を探せずにいた。

20世紀に入りながら世界には、チュチェと呼ばれる新し

い哲学思想が登場した。

偉大な金日成主席が創始し、敬愛する金正日総書記が深化、発展させた人間中心の哲学思想であるチュチェ思想は、人類に与えられた新しいのろしであった。

不世出の偉大な思想家たちが高く掲げたこのチュチェののろしは、今日、世界を明るく照らしながら人類の進歩と発展を力強く促している。

チュチ思想は自然と社会、人間にたいする新しい原理を持って人類の思想史に出現した。

本書ではチュチェ思想が明らかにした、新たな社会・歴史原理について解説しようと思う。

読者たちは本を読みながら、自分の生活する社会の面貌とその変化発展の過程、そして社会・歴史を主導していく主人公は誰であり、社会が果たしてどういう道に沿って前進して行くのかについて理解するようになるであろう。

目　　次

「社会の本質とその変化発展の合法則性も、人間を中心にすえてこそ、正しく把握することができます。社会は人びとと、かれらがつくりだした社会的財貨と、それを結びつける社会的関係からなっています」

金 正 日

1. 開かれる人間社会の大門

これから社会に対する正しい認識をもつために、その大門を開いてみようと思う。

チュチェ思想が明らかにした社会・歴史原理は、社会の本質、社会・歴史の主体、社会的運動の本質的特性という体系で構成されている。

この章では社会の本質について見ることにする。

1） 社会には人々が集まって生きている

特出した世界的出来事—社会の出現

今から200万年前、地球上にはその歴史上類例を見ない一つの大きな出来事が起こった。それは、ある火山の大爆発や大地震でもなく、地球と他の惑星との破壊的な衝突でもない。

それは200億年という太古の宇宙自然の歴史上いまだかつてなかった出来事、人類社会の出現であった。

人類の誕生と社会の出現

まさにそれがために世界はとうとう旧態依然とした本来の

歩みを止め、自然と社会の相互関係の中で新しい歩みをする転換期を迎えるようになったのである。

社会は出現するや否や、その特出した威力を自然の前で誇示しながらそれに果敢に進出し、長い間居眠りをしていた未開拓地を振動させながらいたるところで自分のユニークな痕跡を残していった。

社会領域の急速な拡大により今日、広大無辺の宇宙自然の利用と変革など人類の生活と運命においても、それこそ新しくも大きな変革が起こっている。

自然と社会を包括する広大な世界の変化発展において主人は、ほかならぬ人間である。こうした人間が社会をなして生き、活動することにより、世界が人間を主人とするものとして転換されることは決まっている。

人間を主人とする世界の変化発展について正しく知るためには、世界の特異な領域としての社会の本質と、その変化発展について知らなければならない。

人々が集まって生きる「家」－社会的集団

金正日総書記は、社会現象に対する明哲な洞察に基づき、1992年1月3日に発表した著作「**社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線**」において、社会とは何かについて科学的に定義づけた。

金正日総書記は次のように述べている。

「社会とは一言でいって、人間が集まった集団です。人間が社会的財産をもち、社会的関係で結ばれて生活する集団がすなわち社会なのです」

短い文章の中に社会の本質が含蓄された、至当な指摘である。

社会は人間が集まって生きる集団。

見るからにこの命題は、人類歴史の数百万年の間、どの哲学者、思想家、政治家も打ち出すことができなかった、社会に対する初めての科学的な定義づけである。

総書記が指摘しているように社会は、人びとが集まって生き、活動する集団である。

これについてもっと具体的に見ることにしよう。

人間は、一人では生きていけない。

社会とかけ離れた人間は、植物にたとえれば落ち葉と同じである。人間は社会的集団を成してこそ、人間らしい面貌を備えて生きることができ、自らの知恵と力を十分に発揮させながら、壮大な世界を自分の要求通りに支配していくことができる。

人間が社会的存在として自らの生存と発展をはかる道はひとえに、互いに集まって社会的集団をなして生きることにある。これが動物のような他の物質的存在とは異なる人間の固有の生存方式である。

勿論、自然界にも群れを成して生きる動物が少なくない。

かりに猿も群れを成して生き、蟻やミツバチも数千数万の群れを成して生きている。またある動物は人間の集団を髣髴とさせるほど餌狩りも「集団的」にやり、危ない時には自分の群れに「信号」を送り、一定の「秩序」によって行動したりする。

しかし、人間の集団は動物の群れとは根本的に区別される。動物の群れが盲目的に結合された固体の単なる集合であるといえば、人間の集団は一定の生活上の要求と利害関係から出発してなされた、目的意識的な結合、組織的な結合である。

人々がこうした社会的関係で結合し、自然と社会を改造変革しながら自分の運命を切り開いていく基本単位が、ほかならぬ社会的集団なのである。

ここで留意すべきことがある。それは社会が人々の集団であるからといって、社会に人間だけがあるのではないということである。前述したように社会には、人間以外にも社会的財貨、社会的関係がある。

人間は赤手空拳で、そして孤立しては生きていけない。人間が生きていくためには、衣・食・住に必要な社会的富がなくてはならず、相互に生産物を交換する協力関係もなされなければならない。

生産工程一つを見ただけでもそうである。

トラックや船、飛行機を作る生産工程には、各種の金属材料と化学材料など、クレーン、ロボット、コンピュータなど

の生産道具が利用され、設計家、工程技師、製作工など多くの人びとが参加する。こうした協力関係は生産活動でのみなされるのではない。国家政治活動も、文化芸術活動もみなこのように行われる。

実際に社会の現実がこうであるため、チュチェ思想は、社会には人間だけでなく社会的富と社会的関係もあるというのである。社会的富が人びとによって創造され利用される物質的・文化的手段であるなら、社会的関係は、社会生活の過程で結ばれる人間同士の関係であるといえる。

ではこの三つの構成部分が同等に社会の存立と発展に作用するのか、ということである。

この三つの要素が社会の存立と発展に必須的であることは間違いないが、その地位と役割においては大きな差をもっている。これにはより中心的な地位を占めて主導的な役割を果たす中核的構成部分、つまり主人がある。

では社会のこの三つの構成部分のうち、すべてを統率し、導いていく真の主人は何であろうか。

社会の真の主人は人間

社会の各構成部分は、太陽系の天体の運動でのように均等な力学的関係をなしているのでもなければ、動物界の食べ物連鎖のように自然発生的な生存関係をなしているのでもない。

自然とは異なって社会にはそれを支配する主人がおり、それによってすべての社会的事象が連携を結んで変化、発展している。

金正日総書記は次のように述べている。

「社会は人びとと、かれらがつくりだした社会的財貨と、それを結びつける社会的関係からなっています。ここで主人となるのはあくまでも人間です」

チュチェ思想は、二つの側面で人間が社会の主人となる根拠を挙げている。

第一は、社会が人間を第一の構成要素としているからだという点である。

人間を抜きにしては社会の発生も、その存立と発展もありえない。今まで科学的に考証された世界考古学の資料によれば、人間の発生と社会の発生はその時期を同じくしているという。社会の発生は人間と切り離せないほど結びついている。

こういうところから社会的富や社会的関係ではなく、人間が社会の真の主人であるというのである。

第二は、人間が社会のすべての変化、発展において主導的な役割を果たしているという点である。

社会にはすでに多くの財貨が蓄積されており、社会と人間の発展において果たすその役割は日増しに大きくなっている。しかし社会的富や社会的関係は人間が出現して初めて作られた人間の創造物として、その創造と変化は全的に人

間に掛かっている。

今まで創造された社会的富は実に膨大であり、その役割は日増しに大きくなりつつある。だからといって、社会における人間の役割が弱化されたと見てはならない。

情報産業の時代である今日、コンピューターなしには生産がなされないと言って人間を無視したり、情報手段の役割を過度に評価したりするのは近視眼的な思考である。社会のすべての富は終局、人間の知能と役割の産物なのである。

社会関係も同じである。社会関係は複雑であり、それが人間の運命とその生活に、そして社会的富の増加に与える影響は少なくない。そのため社会の存立と発展において社会的関係を決して無視することはできない。

では社会的関係がどのようになされ、人間との相互関係はどうなのかという問題を上程させて見よう。

社会的関係はいくら複雑に絡んでいても、その大半が狭い範囲では人間同士、広い範囲では国と民族間の接触と交流を通じてなされる。

勿論今日、インターネットの急速な普及により人間同士や国家間の連携がより密接になるなど、各種の近代的手段が社会的関係をより合理的に、便利に変えていくうえで大きな役割は果たしているが、それらもみな人間によってコントロールされるものである。

以上で見たように、社会的富を作りだし、利用するのも人

間であり、すべての社会的関係を結び変化させるのも人間であるため、人間を社会の創造者、管理者、利用者だというのは当然なことである。

社会の主人は、まさに人間である。

2） 歴史を通じてみた社会の類型

初の社会が出現して以来、今まで存在した社会の類型は一つや二つでない。

人類は様々な類型の社会を作ってその中で生活してきながら多くの紆余曲折も経たり、自主的な生をめざして創造と闘争の道に出たりした。社会を変化させていく平坦でない歴史的過程で人間に合わない社会は変革的な闘争を通じて覆した。

もちろん全体的に見るとき、進歩的人類の激しい闘争により歴史の流れが退歩ではなく、進歩と変革の方向へと進んできたということは言うまでもない。

では曲折の多い人類史の発展過程で、人間が初めて作った社会はどういう社会であり、人間の理想を実現する社会はどういう社会であるかについて見ていこう。

人類の初の社会—原始共同体社会

原始共同体社会は、人間が世界に出現しながら始めて

作り出した人類の初の社会であった。

原始共同体社会は今から約200万年前に発生して、5千年前まで存在した。

原始共同体社会の出現、これは永遠で無限大の物質世界の発展における根本的転換であり、現実世界発展の新たな歴史、偉大な人間活動の新しい時代の到来であった。

原始共同体社会が出現する前には、いかなる人間社会も存在しなかった。あったとすれば、蕨のような植物や恐竜のような無意識的な生物、無生物だけが支配していた自然があっただけであった。

世界の考古学者や研究者たちの長い期間にわたる研究により今日になって初めて、原始共同体社会にたいするわりあい科学的な結論が出るようになった。

原始共同体社会は一言でいって、人々が原始的平等の関係を結んで共同生活をしていた社会である。

類人猿の段階を脱したばかりの人々は、この期間に原人,古人、新人の段階を経て、原始的な群れをなし、母系氏族社会と父系氏族社会という氏族共同体を単位にして暮らしてきた。

人々の地位は今日のような階級や階層に区分されておらず、未熟で素朴な形態ではあったものの平等であった。この社会には、氏族評議会という原始的な政治組織があり、氏族長、首長、軍司令官があった。

生産道具は、旧石器時代、中石器時代、新石器時代を経ながら発展してきた石器であり、後は青銅器であった。人々は生産手段を共同で所有し、ともに働き、生産された物を共同で分けて消費した。もちろん原始社会での生産手段と生産物は幼稚であったが、それが共同で生産され、分配され、消費されたという点では階級社会と区別される。

人々の意識はトーテミズム、アニミズムのような原始的宗教意識に支配されており、科学や文字もなく、社会の全構成員が無知蒙昧であった。

原始社会の末期に至って、氏族社会のメンバーは敵対する階級に分かれるようになった。氏族評議会の頭は、漸次、自分に与えられた政治的指揮権を特権に転換させて世襲化し、それを利用して他の氏族構成員たちの利益を侵害し、彼らと敵対する勢力になり始めた。一方、生産力が発展するにつれて、人々が消費して余った生産物が生じ、これを独り占めにして他の氏族のメンバーを搾取するのに利用する人々が現れるようになった。

原始社会の末期に至って階級の発生とともに国家も発生した。

国家は政治的、経済的特権を持つ人々の地位を合法化し、強固なものに固着させるための政治組織として出現した。こうして原始社会は搾取社会へと移行するようになった。

階級的対立の初の産物—奴隷所有者社会

奴隷所有者社会は、国家主権と生産手段、奴隷にたいする奴隷主階級の完全所有に基づく初の搾取社会であった。

この社会で階級間の差と矛盾、葛藤、対立が生じ、支配して搾取する階級と支配され搾取される階級が形成された。

その構成を見れば、基本階級は奴隷と奴隷主であり、そのほかに一部の手工業者と小農民がいた。

奴隷主階級はこの社会の「主人」として国家主権と土地をはじめとする基本生産手段、ひいては奴隷まで完全な所有物にし、奴隷たちを過酷に搾取した。

当時、この社会で勤労大衆の基本をなしていた奴隷たちは、圧迫され蔑まれる被抑圧、被搾取階級であり、奴隷主の意のままに処分される「話す道具」に過ぎなかった。古代ローマ法典のある条項にもあったように、「奴隷は動物であり、品物」であった。奴隷たちは動物のように数えられ、生命のない品物のように配られたり、売買されたりした。

奴隷の境遇がどうであったかは、古代ローマの時代、ローマ人たちが農場の道具を三つに分類したところでも明白に現れている。彼らは農場の道具を①明白に話すもの②曖昧に話すもの③まったく話せないもの、に分類したが、ここで一番目の場合が奴隷であった。奴隷たちは主人が死んだり、または大きな宮殿を建設する際には、生贄として主人のお墓の

中や建物の礎の隣に生き埋めされたりした。

一方、手工業者たちと小農民の境遇も奴隷たちと別に差はなかった。

彼らは奴隷所有者たちの搾取と抑圧を受け、日を追って零落して奴隷になるケースが多かった。

奴隷所有者社会では奴隷所有者の人身的従属から脱するための奴隷の闘争が激しく起こり、それによってこの社会は崩壊した。

世界に知られているB.C.73年～ B.C.71年、ローマで起こったスパルタクス奴隷暴動をはじめとする奴隷たちの暴動は、奴隷主階級に甚大な打撃を加え、奴隷制度そのものを根こそぎ揺さぶった。奴隷所有者社会が崩壊した後に生まれた搾取社会は、封建社会であった。

身分の社会―封建社会

封建社会は封建地主、領主たちが国家主権と生産手段を握って、農奴、農民たちを過酷に抑圧して搾取した社会であった。

封建社会が存続した時期は、朝鮮では高句麗が建国されたB.C.3世紀から19世紀の中葉までであり、西ヨーロッパでは西ローマ帝国が滅ぼされた5世紀からイギリス・ブルジョア革命の前夜である17世紀の半ばまでである。

封建社会は、奴隷社会を交替して生まれた、他の類型の

搾取社会として、この社会では奴隷社会とは異なって露骨な支配と搾取形態ではなく、身分や土地を通じたより狡猾な、間接的支配と搾取形態が支配していた。

封建社会で支配階級は、宗教を利用して農民たちに対する搾取と抑圧を隠蔽しようとし、その過程で宗教的な幻想が全社会に流布され教会の精神的独裁が支配するようになった。後世の人々が中世を指して「宗教の世紀」と呼ぶ理由がここにある。

封建社会ですべての権力は最高権力者である皇帝や国王、法王に集中され、彼らによって国家活動が行われていた。封建支配階級は身分制度に勤労人民大衆を縛り付けて政治的に抑圧し、すべての階層はそれぞれ一定の身分に属して従属と支配を受けた。

封建社会の基本階級は地主（封建領主）と農民であり、そのほかに手工業者、商人たちがいた。封建地主は搾取階級、支配階級であり、農民は被搾取、被支配階級であった。

封建社会で勤労人民大衆に対する封建地主階級の抑圧と搾取は身分制度によって合法化されていた。封建社会で支配階級―搾取階級は特権的身分であったし、被搾取階級は低い身分に属していた。

特権的身分に属したものは、国家の高級官吏になりえ、租税と賦役から免除され、罪を犯した時も減刑の対象となっていた。低い身分の人々は代を継いで搾取と抑圧、蔑視を

受けなければならなかった。このように身分制度の基礎にはその社会の階級関係が置かれてあった。身分制度はいったん確立された後は階級関係とは相対的独自性を持って世襲的に維持されてきた。

封建社会で基本生産手段は土地であり、封建地主と領主たちは多くの土地を掌握して農奴と農民たちの労働や労働生産物を封建地代の形態で搾取した。

封建社会でも人民大衆は決して手を拱いて死の道を選ぼうとばかりはしなかった。

中国の歴史上だけでなく世界の歴史上でも中世反封建闘争の序幕として知られているB.C.209年に起こった中国秦始皇の封建王朝に反対する陳勝・呉広の乱から始まって西方と東方総じてほぼ2千年間も起こった農民たちの反封建闘争によって、絶対のように見えていた封建社会が漸次崩れていった。

封建社会の次に出現した社会は、最後の搾取社会であり、歴史上最も反動的な社会である資本主義社会である。

黄金と資本の活躍舞台－資本主義社会

資本主義社会はごく少数の資本家階級が国家主権とすべての生産手段を独り占めして、勤労人民大衆を抑圧、搾取する、人類の最後の搾取社会である。

資本主義社会の特徴は、中世の宗教的および政治的幻

想によって隠蔽されていた搾取を公然としていて破廉恥なもの、直接的で残忍なものに転化させ、人間の人格的価値を交換価値に転換させたところにある。資本主義社会で少数の搾取階級はあらゆる権利と自由、享楽をみな享受するが、労働者、農民をはじめとする広範な人民大衆は初歩的な自由と権利も持たずに人間以下の生活をする。

資本主義社会で資本家階級は、身分的従属から解放された勤労大衆を賃金奴隷に転落させて搾取する。

封建社会の身分制度の代りに、いま一つの搾取道具として登場したのが黄金と資本であった。黄金と資本が支配することからして「黄金万能の社会」と言われている資本主義社会では、人々の身分関係が交換関係に転換され、勤労人民大衆に対する搾取と略奪が露骨に，公然と敢行される。この社会で何の生産手段も持っていない勤労者たちは、資本家階級に雇用されて自分の労働力を売らなければならない。

早くからマルクスも言ったように、この社会では暴力的抑圧の代わりに買収が現れ、剣の代わりにお金が社会的権力のもっとも主なテコとなったのである。

資本主義社会で労働者階級をはじめとする人民大衆は社会生活のすべての分野であらゆる無権利と蔑みを強要された。

資本主義社会は、国内の人民だけでなく、他の国と民族も侵略し略奪することをその本性とする、もっとも破廉恥で横

暴な搾取社会である。

資本主義の滅亡は必然的である。それは資本主義社会があくまでも個人利己主義に基づく社会であり、お金がすべてを決定する最も反動的な社会であるからである。

資本主義は個人主義をごく少数の資本家階級の貪欲に転換させ、個人主義に基づく社会の敵対的矛盾を極度にいたらせた。

資本主義社会では個人の利益が最高の理想と目的となっており、個人の蓄財と享楽のために他人を犠牲にするのが普遍的な現象となっている。資本主義社会では日を追って「富益富、貧益貧」(富める者はますます富み、貧しき者はますます貧しくなる)の現象が拡大されつつある。

情報産業がいくら発達しているとしても労資間の矛盾と対立, 貧富の格差と失業危機、経済恐慌、不景気のような、資本主義社会の不治の病は治せず、資本の搾取的、略奪的本性も変わらない。情報産業の発展が決して資本主義社会の階級的矛盾と対立を解消させず、人民大衆の自主的要求を実現させることはできない。

高まる人民大衆の自主的要求と日増しに深刻になっている資本主義社会の不平等と不均衡、反動性と反人民性からして、それは必ず滅亡する。

個人主義に基づく資本主義社会が集団主義に基づく社会主義社会へと移行するのはたがうことのできない歴史発展

の法則である。

社会主義社会は資本主義社会に反対する闘争の過程で人民が打ち立てた新しい社会、あらゆる搾取と抑圧が一掃される人類歴史上最も先進的な社会である。

人類の理想郷—社会主義社会

過ぎ去った社会の全期間，人々は搾取と抑圧のない社会を切に念願してきた。その世紀的念願は、数千年の歴史の中で陣痛をなめただけで、一度も実現されたことがなかった。

やがて人類の理想が実現される社会は見いだされたが、それは資本主義社会でも、封建社会や奴隷社会でもなかった。

社会主義という名を持った社会、社会主義社会であった。広範な人民大衆の理想を実現する唯一の社会は、ほかならぬ社会主義社会である。

社会主義社会の真面貌については、朝鮮人民が営んでいる社会主義的生活を通じてみることができる。

世紀にわたって国の政治から疎外され、搾取社会で奴隷の運命だけを強要されてきた朝鮮人民は、社会主義を立ち上げたことによってはじめて国家と社会の真の主人となり、政治舞台に登場するようになった。

1990 年 4 月に選挙された最高人民会議第 9 期代議員の構成を見れば、労働者が 37%、協同農場員が 10.4%、その他、政治家、科学者、芸術家、宗教人、などで構成され、そ

のうち女性代議員が 20.1%を占めていた。地方人民会議の代議員の構成も同じであった。

過去の下男、日雇い人たちが、今日には最高人民会議の代議員となっており、現職の靴屋、オンドル修繕工、上下水管理工が代議員となっている。これは解放前に

は想像もできなかったことであり、今日も資本主義的搾取と植民地従属下であえいでいる諸国の人民大衆には伝説のような話に聞こえるであろう。

それゆえ、これを見て西側のある政治家は、「北朝鮮に特権層があるとするなら、それは人民」であると言っており、フランスのある教授も朝鮮人民こそ国事を討議する「政治家」であり、尊厳のある「統治者」であり、公正な「法官」であるといったのである。すると社会主義社会がどういう社会であるため、このように優れているのかということである。

それは何よりも、社会主義社会は人民大衆が主人となっている社会であるからである。

金正日総書記は次のように述べている。

「社会主義社会は人民大衆が主人となった社会であり、一つに統一・団結した人民大衆の創造力によって発展する社会です」

社会主義社会ではかつて奴隷、農奴と呼ばわれ、さげすまれていた労働者、農民など、絶対多数の勤労する人民大衆が 社会の主人となっている。

過ぎ去った社会・歴史の全期間、どの社会でも主人になれなかった人民大衆であった。その彼らが社会主義社会では社会の真の主人となって搾取階級の独占物となっていた国家主権と生産手段を自らの手に掌握し、自らの力で管理、運営するようになった。

社会主義社会はまた、すべてが人民大衆のために奉仕する社会であるというところにその特徴がある。

社会主義社会ではすべての勤労者がみな衣・食・住の権利とそれに必要な条件を国家と社会から実質的に保障されており、安定した職業を持って自らの能力に応じて社会と自分自身のための創造的労働に参加し、労働の結果によって分配されているだけでなく、国家の人民的施策によって多くの恩恵をこうむっている。

その一端を朝鮮の実情を通じて見ることにしよう。

社会主義朝鮮では国家の負担で住宅を作って労働者、事務員に配っており、協同農民たちにも無料で文化住宅をつくってあげている。

1992 年の春のある日、探訪記者として朝鮮を自由取材しようと来た日本朝日新聞の記者が平壌光復通りのある家に立ち寄ったことがある。彼は家が何㎡であるかと聞いた。「約80 ㎡にはなるでしょう」という主人の答えを聞いてどうも信じられなかったのか、自分で直接家の面積を測ってみた彼は、「80 ㎡ではなく 110 ㎡であります。110 ㎡！」といいながら、日

本では平凡な勤労者がこんな広い家で暮らすなんて想像すらできないことだ、話だけでは日本の人々が信じがたいでしょうと、それぞれの部屋を回りながらカメラにみんな収めて行ったこともある。

それゆえ世界的に有名な宗教家までも朝鮮を訪問して、朝鮮に限っては宣教がいらない、朝鮮は聖書の教理がすでに実現された国、イエスが夢見ていた理想社会であるといいながら、「エデンの園ではなく、チュチェの楽土が地球上に作られた、民衆福楽の園」だと驚嘆を禁じえなかった。

以上で見たように、社会主義社会は人民大衆が国家と社会の主人となった、真の人民の社会、最も先進的な社会である。

「社会的運動の主体は人民大衆です。人民大衆をぬきにしては社会的運動そのものが存在しえず、歴史の発展について語ることもできません」

金　正　日

2. 歴史の主人公を探して

前で私たちは社会の本質と歴史的に形成された多様な社会制度について考察した。

チュチェ思想の社会・歴史原理の次の部分に該当する体系は、歴史の主体に関する部分である。

この章では社会・歴史の主人公、主体が誰であり、彼らがどのようにして歴史の主体としての地位を占め、役割を果たすようになるかについてお話しようと思う。人民大衆が歴史の主体である、そして人民大衆が歴史の自主的な主体となってはじめて自らの運命を自主的に、創造的に切り開いていくことができるというのが、この章の中心的内容である。

チュチェの社会・歴史原理は、歴史の主体を人民大衆とみなし、歴史発展において人民大衆が果たす主体としての決定的な役割を科学的に解明することにより、社会・歴史が名実ともにチュチェの歴史、人民大衆の歴史になるようにした。

チュチェ思想は単なる理論ではない。それは大きな実践力を持って、20 世紀を一変させ、東方の国、社会主義朝鮮の現実に立派に具現された。

今日、世界にその名を高くとどろかせている人民大衆中

心の朝鮮の立派な現実は、チュチェ思想がもたらした貴重な結実である。

ではチュチェ思想は人民大衆の歴史をどのように見ており、社会主義朝鮮の現実はどうなのか。

1）歴史を動かす人民

「以民為天」

人々は昔から天を自らの運命を救ってくれる「唯一の絶対的救援者」、「救世主」として崇拝してきた。

古代人たちは天を人間の吉凶禍福を主宰する絶対的な存在として崇拝し、封建時代の宗教信者たちは、盲目的な天崇拝意識を利用して、宗教の教理を体系化し，合理化した。

搾取社会の統治者たちは、自らを天の啓示を受けて運命を救ってくれる「天帝」、「皇帝」に自称したりした。しかし歴史の偉大な存在、全知全能な運命の救世主は「神」でもなければ「王様」でもなかった。

では社会と歴史を切り開き、人々の運命を救う天のような絶対的存在はないのか。

今日、朝鮮人民ばかりでなく世界の人々の中でも大きな波紋を起こし愛読されている本がある。それが偉大な金日成主席が書いた回顧録**「世紀とともに」**である。世人の中で「人類の太陽の全書」であり、「朝鮮革命の万年の財貨であり、革命の教

科書」として称えられている回顧録には、金日成主席が指導した抗日革命闘争の道のりがリアルに記されている。

1998年6月まで「第1部　抗日革命編」を八巻で収めたこの図書は、出版されるやいなや大きな反響を呼び起こした。

発表されて六ヶ月も経たないうちに世界 60 あまりの国々から150あまりの出版・報道物が回顧録の構成体系と章、節と詳細な内容を我先にと載せ、それが14の外国語で数十万部も翻訳・出版されたのである。外信はその普及数において「他の図書を圧倒して第1位を記録」したと伝えた。

回顧録は去る20有余年間170あまりの国々で研究普及され、数十カ国で20あまりの民族語で出版された。

回顧録がこのように大きな反響を呼び起こした原因は、「以民為天」を生の座右の銘とした偉大な金日成主席の一生、人民を最高の存在、天のような存在として押し立て、人民とともに歩んできた人民尊重の一生が感銘深く綴られていたからである。

金日成主席は回顧録「**世紀とともに**」で次のように述べている。

「『以民為天』－人民を天のごとくみなす、というのがわたしの持論であり、座右の銘でもあった。人民大衆を革命と建設の主人として信頼し、その力に依拠するというチュチェの原理こそ、わたしがもっとも崇敬する政治的信仰であり、まさに

それがわたしをして、一生を人民のためにつくさせた生活の本質であった」

この名文の中にあるように「以民為天」ーこれは早くから主席が打ちたててきた持論であり、座右の銘であった。

大昔、人々は天を神秘で無限大の力を持つ造物主、天地万物の主宰者とみなしてきた。結局「以民為天」という言葉は、何らかの神秘な存在や力ではなく、ほかならぬ人民が世界の支配者、改造者、革命と建設の主人、原動力であることを意味するのである。

こういう点から見るとき、主席の「以民為天」の思想は、人民に対する観点と立場において最高の思想であるといえる。

これを根本としているためチュチェ思想は名実ともに、勤労人民大衆の自主性をめざす不滅の革命学説、人民にたいする愛と尊重の精華として光り輝いているのである。

チュチェ思想のすべての体系と内容には金日成主席が一生涯座右の銘とした「以民為天」がそのまま具現されている。

では、主席が天のごとくみなした人民は果たしてどういう存在なのか？

「いったい人民とはどういう人々なのか？」

ここにそれに答える、一つの資料がある。

朝鮮人民が日本帝国主義の軍事的占領から解放された

直後のことである。

解放された朝鮮にどういう社会を樹立すればいいかという問題を討議するために、 ソ連とアメリカが共同調査団というものを作って朝鮮に来た。

朝鮮に滞在する間、その代表団は朝鮮での新しい社会建設に対する人民の動向を「調査」しようとした。

その調査の一形式として、アメリカの代表たちと朝鮮の人々の間に談話があったが、そこでアメリカの代表は、いわゆる「アメリカ式民主主義」について一場演説をした。彼はうぬぼれながらアメリカ社会が人民に自由を与え、「豊かな物質生活」を保障する「優れた社会」であると力説した。彼の大げさな演説が終わることを待っていたある農民代表が、彼にこう聞いた。

「あなたたちはアメリカ社会がよいといっているが、だったらあなたたちは、農民たちに土地を与えていますか」

するとアメリカ代表は顔が真っ赤になりながら答えに窮した。ぐずぐずしながら答えずにいる彼に農民代表は連続的に質問をした。

「あなたたちの法にも女性に男性と同等な権利を付与するとの条項がありますか？」

彼はこの質問にも答えなかった。いわゆる世界の前で万民平等法と宣言したアメリカの法であるが、男女の平等を裏付ける条項が、どの法にもなかったからである。すると農民代

表はまたこう訊いた。

「あなたたちは、アメリカ社会が人民のための社会だというが、すると労働者、農民、女性を除けばいったい人民とはどういう人々ですか？」

アメリカの代表は、まったく口がくっついてしまった。

彼にとって「人民」とはごく少数の資本家たちであったからである。一方、農民代表が言う人民とは、労働者、農民、知識人をはじめとする広範な階層を念頭に置いたものである。アメリカ代表の人民に対する理解と農民代表の理解を比べながらわたしたちは、人民にたいする正確な回答を得ることができる。

チュチェ思想では人民について次のように定義している。

金正日総書記は1994年11月1日に発表した著作「**社会主義は科学である**」において次のように述べている。

「人民大衆は働く人々を基本に、自主的要求と創造的活動の共通性によって結合された社会的集団である」

いかに明哲な定義づけか。

多くの人々が集まって生活する社会の中で真の人民は、勤労する人々であり、自主的要求をもって創造的活動をしない人間は人民の隊伍に入ることができない。

これが人民にたいするチュチェ思想の観点であり、その根底をなすものであるといえる。こういう観点と態度は歴史と

現実にも符合し、人民大衆を中心に据えている、チュチェ思想の根本的立場の発現であるとも言える。

では人民大衆の構成部分を詳しく見ることにしよう。

実際、社会の現実に入れば人民大衆を見極めることが決してたやすいことではない。それは歴史的に人民大衆の構成部分が不断に変化してきたからである。

代表的に見て、搾取社会での人民大衆の構成と社会主義社会での構成は本質的に異なる。

大体、搾取社会で人民大衆は、少数の搾取者、支配者によって抑圧され蔑まれる広範な階層を包括する。しかし搾取と抑圧が一掃された社会主義社会では、すべての階級や階層が人民大衆となる。

では絶えず変化する各段階の社会の中で、多くの社会的集団からなる社会の中で誰が人民大衆であるかを正確に見極めるためにはどうすべきであるのか。

これはその基本尺度を正しく定めるときにのみ解決できる。

金日成主席は回顧録「**世紀とともに**」において、張蔚華(1913．1.18－1937．10.27、中国の国際主義戦士、財産家)について次のように回顧している。

「わたしは幼いころから財産の有無や多少によって人を評価しはしなかった。人を評価する基準は、その人が人間をどれほど愛し、人民をどれほど愛し、祖国をどれほど愛してい

るかということであった。金持であっても祖国を愛し人民を愛する人であればりっぱな人間とみなし、無産者であっても祖国愛と人間愛に欠けていれば下劣な人間とみなした。一言でいって、思想を基本にして人を評価したのである」

主席の言葉によれば、人民大衆のメンバーであるか否かを分ける基本尺度は、出身ではなく、思想、世界観であると見ることができる。

もちろん各社会には階級が存在しているため、人民大衆という言葉には、社会階級関係が反映されるようになる。だからといって、階級的面だけを一面的に見てはならないであろう。

人間の思想と行動は、社会的、階級的境遇の影響だけを受けるのではない。人々は革命的な影響を受けて先進思想を体得すれば、社会的、階級的境遇はどうであろうと人民大衆に奉仕することができる。

思想は灯台と同じである。船が灯台にたよって自らの道を探すように、人間は思想にたよって人生の道を探す。

こういう連関の中でこの問題を見るなら、搾取階級に属している個別の人々も自主的な思想を持って革命闘争に参加すれば人民大衆のメンバーになりえ、反対に勤労する階級の出身であっても思想的に変質すれば、革命と人民の背信者、敵になりさがりうるという結論に至るようになる。

人民大衆のメンバーであるか否かを分ける基本尺度は、

人々がどういう社会的、階級的土台を持っているかではなく、いかなる思想を持ったかにあると見るべきである。

　ては人民大衆を規定する基本要因としての思想は、どういう思想であるのかという質問が提起される。

　歴史的に人々の活動に影響を与えた思想は一つや二つでない。

　人民大衆のメンバーにならせる思想は、なによりも社会主義思想である。

　社会主義思想は人民大衆の自主的要求をもっとも正確に反映した自主的な革命思想である。社会主義思想を持った人であれば彼がどの階級の出身であり、どこで暮らしているかに関係なく、人民大衆の堂々たる一構成員になりえる。

　しかしここで逃してはならない点がある。

　それは、社会主義思想を持った人だけが人民大衆のメンバーになりうると見てはならないということである。

　社会主義思想とともに、愛国、愛族、愛民の思想も人々を人民大衆の一構成員に結合させる思想的基礎となる。

　愛国、愛族、愛民の思想は、国と民族の自主性、人民大衆の自主性を貴重にし、愛する自主的な思想であるため、こういう思想を持てば誰もが祖国と民族、人民に奉仕することができ、人民大衆の一構成員になりうるのである。それゆえ、真の愛国、愛族、愛民の思想も、社会の構成員を人民大衆に結合させる、思想的基礎となるのである。

人民は歴史の主体

天のごとく押し上げた人民をチュチェ思想では歴史の主体と定義づけている。

歴史の主体という言葉は、社会的・歴史的運動を目的意識的に起こして進めていく、担当者を意味する。

歴史の主体、担当者は人民大衆である。

金正日総書記は次のように述べている。

「人民大衆は社会・歴史の主体である」

人民大衆が歴史の主体になる根拠は二つである。

まず、かつて起こったすべての社会的・歴史的変革が人民大衆によって遂行されたというところにその重要な根拠がある。

歴史上にあった多くの進歩的な社会的変革、つまり奴隷解放闘争、反封建闘争、社会主義革命はみな人民大衆の闘争によって起こっている。

次にその根拠は、尽きない創造的知恵と力を持つ人民大衆によって社会のすべてが創造されているというところにある。

金日成主席は生前に、この世に全知全能な存在があるとするならそれは人民大衆であると言いながらいつも人民の中に入り、難局がかもし出されれば人民大衆から力を得、彼らに依拠してそれを乗り越えていった。

それゆえ、朝鮮人民は主席を「人民の偉大な領袖」と高く

たたえ、主席の一生涯を「人民のための一生涯」と言っているのである。

偉大な金日成主席が「以民為天」を生涯の座右の銘としたように、この世には人民大衆よりもっと大きな創造的知恵と力を持った存在はない。

ここで強調しておきたいことがある。

それは人民大衆だけが歴史の主体であり、個人は歴史の主体と言えないということである。それは個人の知恵と力そのものが制限されていることと関連する。

個人の能力は、底知れない泉のように絶えず湧き出る永遠なものではない。

反動的搾取階級も歴史の主体になれない。彼らは歴史の主体ではなく、歴史の反動である。彼らは歴史を逆行させ、人民の創造物を抹殺する張本人である。

歴史的に見れば、実際彼らが犯した侵略戦争によって数多くの社会的財貨が破壊、抹殺され、社会が数十年間、数百年間も後退したりした。人民大衆の上に君臨してすべてを左右したが結局は自らの運命さえ保存することができなかった古代ローマの独裁者カエサル、19 世紀フランスの皇帝ナポレオン、20 世紀ファッショ・ドイツのヒトラーとファッショ・イタリアのムッソリーニなどはみなそうである。

今も反動的支配層は、機会があるたびに代弁者たちを利用して、自らを偉大な統治者だの、何だのと押し立てている

が、実際に彼らは、社会を開拓するなんの力も意志も持っていない。あるならば、世界を支配し、人民大衆を抑圧する能力でない「能力」、そして蓄財欲があるだけである。

今日も人民大衆は歴史の主体であるという偉大な真理を無視して、搾取階級とその反動層をたたえるブルジョア反動らのデマ宣伝は続いているが、歴史的真理の前でその衰弱性は日に日に露呈されつつある。

2）彼らはなぜ悲劇的な受難の対象となったのか

前では人民大衆が社会・歴史の主体であるということについて解説した。

しかし過ぎ去った歴史的現実を振り返えて見れば、人民大衆は歴史の主体でありながらも歴史の主体として当然の地位を占め役割を果たせなかった時代もあった。人民大衆は搾取社会で歴史の主体ではなく、歴史の対象となって搾取階級による悲惨な運命を強要されてきた。

金正日総書記は1982年3月31日に発表した論文「**チュチェ思想について**」において次のように述べている。

「過去の搾取社会において、…勤労人民大衆は少数の支配階級によって無権利を強いられ、搾取され抑圧されて社会の主人としての当然の地位を占めることができませんでした」

私たちは、人民大衆が歴史の主体ではなく、歴史の対象となってきた悲惨な姿を、植民地奴隷の生活を強要された諸国人民の境遇を通じて見ることができる。またここで、人民大衆が自分の運命を自主的に創造的に切り開いていく歴史の真の主体、自主的な主体になるためにはどうすべきかについても認識するようになる。

植民地民族の悲しみ

人間が一生を生きていくうえでは、様々な悲しみを体験するようになる。そのうちもっとも大きな悲しみは、国を失った悲しみ、亡国の民になって祖国を離れる悲しみである。

アリランアリランアラリよ
アリラン峠を越えて行く
わたしを捨てて行くきみは
一里も行かずに足いたむ

愛する人と別れる悲しい気持ちを歌ったこの「アリラン」は、去る 20 世紀のはじめ日帝によって強要された亡国奴の悲しみを抱き、生きる道を探し求めて他郷へと発つ朝鮮人民に好まれていた歌である。

世の中には、自分の祖国を離れて異国の地で望郷歌を歌いながら生きる人々が少なくない。するとどうして彼らは自

分が生まれ育った故郷を離れて、来いと言う人もなく迎えてくれる人もいない、見慣れぬ異国の地へと行かなければならなかったのか、植民地—そのためであった。

長い歳月、奴隷の絆と身分的従属、資本の鎖に縛られて受難を強要されていた人民大衆は、植民地によって階級的抑圧とともに、民族的従属まで甘受しなければならなかったのである。

世界の陸地面積の 5 分の 1 も占めるアフリカ大陸は、1876年当時までも領土の 6 分の1が植民地であったし、1900年には 10 分の9が帝国主義者によって占領されていた。

言葉通りに植民地大陸であったアフリカでは、かつて奴隷貿易によってアメリカに連行された奴隷の数が 1451 年から 1870 年までの間にほぼ 939 万名に達しているという。それで 17 世紀にアフリカに世界人口の 20%が暮らしていたとすれば、20 世紀の初めにはやっと 7.7%しかならないという。こうした膨大な数の「壮健な働き者」を奪われたアフリカは、今日もその弊害を深刻に受けている。

植民地諸国人民の悲惨な運命について語るとき、アジア諸国人民の運命についても言わざるを得ない。

早くから「日が昇る大陸」として世界で始めて大同江文化、ナイル川文化、インダス川文化、メソポタミア文化、黄河文化を創造した大陸—アジアに植民地奴隷の運命を強要し始めたのは、インドに初の植民地拓植会社である「東インド会社」

を設立したイギリス植民地主義者たちであった。イギリス植民地主義者たちは、インドで自分たちを最高の統治者、土地所有者と自認しながら資本主義的搾取方法に伝統的なアジア的統治方法まで結合させ、未曾有の無慈悲さでインド人民を搾取した。

歴史学では 19 世紀を指して地球的規模での「移民の世紀」と呼んでいる。その中心が中国とインドであった。統計資料によれば、国外で暮らしている中国人の数は約 3000 万名であり、世界 5 大陸の 120 あまりの国で暮らしているという。

植民地奴隷の運命を強要された国と民族は多かったが、朝鮮民族のように 40 有余年間も人類史上その類例を見ない悪辣な統治を受けた民族はかつてなかった。

朝鮮は 1905 年 11 月 17 日、日帝による侵略的で従属的な「乙巳 5 条約」のでっちあげにより主権を完全に奪われ、その植民地に転落された。

日帝は朝鮮を占領して武断統治、銃剣統治を実施して朝鮮を一つの「大きな監獄」に変え、朝鮮人民のすべての政治的、経済的および文化的権利を全部奪い取った。

朝鮮民族はそれこそ民族として生存するか滅亡するかという、運命の岐路に立たされた。

朝鮮だけでなく、他の植民地諸国の境遇も同じであった。しかし植民地諸国の人民は、従属を甘受しただけではなかった。

金日成主席が指摘しているように、圧迫のあるところには抵抗があるものである。植民地諸国の人民は積もりに積もった憤怒を爆発させながら自らの自主性を守るための民族上げての闘争に立ち上がった。

アジアの 3 大抗戦

多くの国と民族が帝国主義者の植民地として送ってきた数 10 年、数 100 年間は、人民大衆にとって受難の時代、暗黒の時代、飢餓の時代であった。

悲劇の時代をそのまま甘受することができなかった人民大衆は、植民地主義者に反対し、植民地制度を覆すための闘争に奮い立った。

金正日総書記は次のように述べている。

「階級社会の全過程は歴史の創造者と歴史の反動、革命の主人と革命の対象、すなわち勤労人民大衆と反動的搾取階級との鋭い闘争の歴史です」

帝国主義の植民地主義的侵略と略奪に決死の抗戦で答えた世界民族解放闘争史に特筆すべき出来事は、アジアの 3 大抗戦である。

アジアの 3 大抗戦というとき、それは 1894 年朝鮮の甲午農民戦争、1851－1864 年中国の太平天国農民戦争、1857－1859 年インドのシパーヒー暴動を言う。

この 3 大抗戦は、19 世紀アジア反帝民族解放闘争の蓋

を開けた抗戦であるといえる。アジアの 3 大抗戦があった 19 世紀は、植民地民族は死なずに生きており、民族自主精神は何ものをもってしてもなくすことのできない、ということを始めて世界に誇示した時代であった。

中国で、太平天国農民戦争の始まりと時期を同じくしてインドでもシパーヒー暴動が起こり、アジアの極東に位置していた封建朝鮮では、甲午農民戦争が起こった。当時、数百年にわたってすっかり衰えた国力を持って鎖国を固執してきた朝鮮は、無制限な蓄財欲と領土膨張欲に気が狂った列強らが虎視眈々機会を狙う、侵略の対象となっていた。アメリカ、イギリス、フランスを始めとする世界の資本主義列強は、先を争って朝鮮を飲み込もうと、飢えた野獣のごとく飛び掛った。

ちょうどその時、甲午風雲の寵児—全琫準が「保国安民」、「斥洋斥倭」の旗の下に甲午の炎を果敢に盛り上げた。規模や激烈さにおいて, 19 世紀後半期朝鮮人民の反封建、反侵略闘争で最高峰をなした甲午農民戦争はそもそも、封建的悪政に抗する農民たちの蜂起であった。しかし、清国の朝鮮出兵と日帝の武力的干渉により、この蜂起は反侵略的性格を帯びた民族解放戦争に転換された。闘争の炎は瞬時に全国に拡大され、封建的支配にさいなまれ、外部勢力に蹂躙されるところであった朝鮮人民を呼び起こし、民族自主の気概を轟かせた。22 万7千名が参加して全国を揺るがしながら激しく展開されていた甲午農民戦争は、日清両国の内政干渉、

指揮者の衰弱性により結局は失敗に終わってしまった。

一方、インドでシパーヒー暴動が起こったのは 1857 年 5 月であるが、その動機は牛と豚を崇拝しその油を食べないヒンドゥー教とイスラム教徒に豚と牛の油を塗った弾薬筒を口で開かせたことによってである。イギリス植民地主義者のこうした行為は、インド民族の宗教に対するひどい侮辱であった。こうした侮辱はインド人民の憤怒を招き、その憤怒は激しい反抗と変わった。インド人民の激しい反抗は、一瞬に全国に拡大された。

こうした事態を見てインドにたいする植民地統治に深刻な危機がかもしだされたと判断したイギリスの支配層は、イギリスの本土から多くの軍隊を引き入れて暴動を無慈悲に鎮圧した。暴動はたとえ失敗したもののその影響力は大きかった。暴動の結果、イギリスのインド支配、広い範囲ではヨーロッパとアジアとの関係において大きな変化がもたらされた。インド人民の不倶戴天の敵であった東インド会社は、1858 年 8 月 2 日に解散され、ほぼ 2 世紀半にわたる略奪に幕を下ろしたのである。

19 世紀の半ばに起こった中国での太平天国農民戦争は、封建支配層のあくどい封建的搾取と、外来資本主義商品の大量流入により人民大衆の生活状態が悪化された結果起こった。この農民戦争を準備し指導したのは農民出身である洪秀全(1814－1864)と彼が組織した上帝会であった。

彼は農民大衆を導いて武装暴動を起こし、太平天国の樹立を宣布した。すぐ大勢力に成長した太平天国農民暴動軍は、各地域で封建政府軍を撃破した。暴動軍は、初期に 2 万名足らずであったが、南京を占領した後には、100 万名の大兵力として成長した。14 年間も続いた太平天国農民戦争は結局、失敗してしまった。

アジアの 3 大抗戦を契機にして、アジアで植民地民族解放闘争は漸次新しい段階に入るようになった。ならびに世界の民族解放闘争も新しい転換期を迎えていた。しかし資本主義列強の植民地支配を終わらせて、人民大衆の真の闘争の進路を探し、人民大衆が社会の真の主人となる国を打ち立てるまではまだまだ遠くも険しい道を歩まなければならなかった。

孤児の身の上

無数の血の跡を残しながらかき分けてきた植民地民族解放闘争、勝利と喜びより曲折がもっと多かったその悲劇の歴史を顧みながら感じることは何か。それはかつてあった奴隷解放闘争、反封建闘争、資本主義に反対する闘争過程には類似点、共通点があるということである。一定の歴史的期間でもない長久の間、そして一回や二回でもなく連続的に繰り返される失敗には、必ず共通した原因があると見るべきであろう。

金正日総書記は次のように述べている。

「人民大衆が歴史の主体としての地位を占めてその役割を果たすためには、必ず指導が大衆に結びつかなくてはなりません。人民大衆は歴史の創造者ではあるが、正しい指導がなければ、社会・歴史発展の主体としての地位を占め、役割を果たすことができません」

指導と大衆の結合

この問題は人民の闘争過程で常に提起されてきたが、歴史的に誰も正しく解決していなかった共通の問題であった。

実際、この問題を解決することは人民大衆にとってすべての闘争の成功と失敗を左右する要の問題であった。

船の羅針盤のような役割からして決して無視することのできないこの問題を置き、人民大衆は長い間模索してきたが、植民地民族解放闘争の段階に至るまで解決を見ずにいた。それにより搾取社会において被抑圧人民大衆が奴隷社会と封建社会の転覆のような、深刻な社会的変革を遂行したにもかかわらずその結実がみな支配者階級に丸ごと渡され、社会と歴史が彼らの意思ではなく、主に搾取階級の意思に従って流れてくるようになったのである。これらは全的に指導と大衆の結合問題がまともに解決されていないことに根本的原因があった。

正しい指導者のいないところでは搾取階級が「指導者」と名乗り、人民大衆の運命は翻弄される。

歴史を振り返れば、奴隷主、封建支配層は運命の救世主であったのではなく、搾取者、支配者であった。ブルジョアジーも例外ではない。実際、ブルジョアジーは人民大衆とともに古い社会を覆すための戦いに参加もしたが、いざ政権を握った後は、「旧友」であった人民大衆を裏切って勤労人民大衆の要求ではなく、自らの利益のみを実現する社会、自分たちだけがいい暮らしのできる社会を作っておいた。

奴隷所有者社会、封建社会、資本主義社会などすべての社会が極少数の搾取者には天国であったが、人民大衆には地獄であった。

人民大衆は、長い歳月、あたかも社会から見捨てられて道端で冷たい風に当たりながら寒さに震える哀れな孤児のように恥辱の中で悲惨な生活をしてきた。

孤児は母親を懐かしむ。かつては人民大衆を保護し、暖かい懐で抱きこむ母親のような人民大衆の保護者、運命の救援者がどこにもいなかった。血を流し、犠牲も多かった平坦でない道を歩んできた人民大衆の曲折の多い歴史に終止符を打ち、人民大衆に歴史の主人としての自主的で創造的な新しい生活を保障してくれる偉人は果たしていつ現れるであろうか。

朝鮮侵略の元凶、伊藤博文を処断して死刑判決を受けた朝鮮の反日愛国烈士安重根（1879．9.21－1910．3.26）はこう嘆いた。

「私を導いてくれる偉人、英雄がいない。5 千年の歴史を持っていながらも踏みにじられ、蔑まれているわが民族を救い、世界に堂々と押し立ててくれる、そのような不世出の偉人に一度たりとも会ってみたい。あ、そういう英雄はいつ現れるだろう。」

人民は領袖を戴いていなければならない

この世に生まれた人間なら誰もが母親から生をもらっている。母親は子供を生んで暖かい懐に抱いて育て、見守ってくれる生の恩人である。

生を与えただけでなく、寒かろうと、暑かろうと見守り、苦しいときも嬉しいときも抱いて育ててくれるのが母親の懐である。

母親がいれば子供はこの上ない幸せを感じるのである。それで母親の懐を離れた人生、孤児の人生が一番不幸であるというのではないか。

人民大衆の場合も同じである。

金正日総書記の名言がある。

「卓越した領袖を戴いていない人民は、親を失った孤児も同然です。」

実に深い意味が込められている名言である。

人民大衆にとって領袖は母親と同じである。

領袖は人民大衆が自らの真の尊厳を守り幸せを花咲かせ、自主的人間の本性にかなった幸せで張り合いのある生を

享受するようにする。

それは領袖が人民大衆を目覚めさせ、一つに集合させるからである。

かつて、人民大衆が歴史の主体でありながらも自分の運命を自主的に、創造的に切り開くことができなかったのは結局、彼らの意識水準が低く、組織化されていなかったからである。

それゆえ、人民大衆は搾取と抑圧を甘受しながらそれを宿命として受け入れ、闘争しながらも挫折と犠牲の苦杯だけを飲まなければならなかったのである。

人民大衆が意識化、組織化されて歴史の主体として自らの役割を全うするためには、自らを覚醒させ、一つに団結させる、指導者、領袖を戴かなければならない。

人民大衆がどのように革命的に意識化され、組織化された力量として結束されるか、どのように自らの責任と使命を遂行するかということは、思想を創始し、組織を作る領袖を戴き、その正しい指導を受けるか否かに全的にかかっている。

では領袖はどういう方であるのか。

金正日総書記は次のように述べている。

「領袖は社会的・政治的生命体の中心であり、人民大衆の意思を体現した最高頭脳です。」

個別的人間の生命の中心が頭脳であるように、人民大衆の最高頭脳は領袖である。最高頭脳としての領袖は人民大

衆を意識化、組織化して一つの社会的・政治的生命体に結合させ、人民大衆が思想的に組織的に統一をなすようにする。

領袖は、団結と指導の中心として、人民大衆の運命を開拓するうえで決定的役割を果たす。これは脳髄が人間の活動で決定的役割を果たすのと同じである。

領袖の役割については、従来の労働者階級の革命闘争史を振り替えてみてもよくわかる。

19 世紀の半ばに活動した労働者階級の初の領袖であったマルクスとエンゲルスは、マルクス主義を打ち出して、歴史の舞台に始めて登場した労働者階級に歴史的使命と解放の前途を指し示し、彼らを資本に反対する闘争へと力強く推し進めた。

資本主義が帝国主義段階へと移った新しい歴史的条件の下でレーニンは、マルクス主義を発展させてレーニン主義を打ち出し、労働者階級と人民を帝国主義の牙城を打ち破り、自由と解放を成し遂げるための闘争へと鼓舞し、資本主義から社会主義へと移行する端緒を開いた。

20 世紀の偉大な領袖は、金日成主席と金正日総書記である。

金日成主席は 20 世紀の時代と人民大衆の自主的な要求を誰よりも明哲に洞察して偉大なチュチェ思想を創始し、革命の参謀部である朝鮮労働党を創建して人民大衆の自主偉業を勝利へと導く革命的党に強化発展させることにより、自

主性をめざす人民大衆の闘争を新たな高い段階へと発展させ、人類史発展の新しい時代、チュチェ時代を切り開いた。

金正日総書記はチュチェ思想を継承発展させてその生命力を引き続き輝かせ、帝国主義者と反動層の策動によって挫折と陣痛をなめていた自主偉業、社会主義偉業を領袖、党、大衆の強力な統一体で進めていくようにして、その命脈を固く受け継がせた。

今日、朝鮮でその威力を誇示している一心団結は、朝鮮のすべての勝利の要因、万能の武器となってさらなる成果をもたらしており、朝鮮を不敗の社会主義強盛国家に浮上させている。

二人の不世出の偉人たちが積み上げた特出した業績は、今日、世界の進歩的人民の中で惜しみのない賛嘆と羨望を呼び起こしている。

今日、朝鮮人民はもう一人の傑出した指導者金正恩同志を高く戴き、その周りに鉄のごとく団結して、チュチェの威力で帝国主義者たちと反動層の反社会主義、反共和国策動を打ち破りながら社会主義強盛国家の建設偉業と人類の自主偉業を力強く進めている。

歴史のあらゆる風波が吹き狂い、難関が重なっても、領袖、党、大衆が一心団結された朝鮮の前進を誰も、何ものでも阻むことができずにいる。

指導者と党の周りに固く団結している以上、朝鮮人民は

歴史の力強い主体として、自らの威力を世界に誇示するであろうし、自らが選択した自主の道、先軍の道、社会主義の道で必ず最後の勝利を達成するであろう。

かつて涙の「アリラン」の歌が寂しく流れていた朝鮮に、今日は、「強盛・繁栄のアリラン」が高らかに響いている。

3） 人類歴史の新しい自主時代－20 世紀

前で歴史の主体について解説した。

歴史の主体は歴史の自主的な主体に発展する。

歴史の自主的な主体は、歴史の主体とは異なって、領袖、党、大衆が一つに統一団結した、人類史上もっとも有力な社会的集団である。

ここではあれほど偉大な歴史の自主的な主体を誕生させた、20 世紀に対する話をしようと思う。

20 世紀はどういう世紀であったのか

人によって 20 世紀にたいする理解はまちまちであろうが、わたしたちは、20 世紀こそ歴史上最も自主的な世紀であったと断言する。20 世紀に入りながら人類は、チュチェ時代、自主時代という歴史の新しい時代を作り上げた。

金日成主席は次のように述べている。

「現代は、かつて大国の支配と従属のもとで抑圧され、さげすまれてきた人民が世界の主人として登場し、自己の運命

を自主的に、創造的に切り開いてゆく自主性の時代であるといえます。」

この世紀に人民大衆は史上初めて歴史の主人として堂々と登場し、順応と屈従という恥辱の絆を脱ぎだし、自主的で創造的な活動で歴史を切り開いていった。

この偉大な時代は史上類のない時代として、もっとも高貴な結晶体、申し子を誕生させたが、それは歴史の自主的主体と社会主義であった。

自主時代の胎動

20 世紀にはいって世界にはかつてなかった新しい兆しが現れ始めた。

それは長久の数世紀の間、無慈悲な搾取と略奪の中で呻吟していた平凡な人民大衆が支配と従属に反対する闘争へ一致決起したことであり、もう一つはそれが世界的範囲に拡大されたという事実である。

これは従来にはなかった歴史的出来事として、一つの大きな政治的地殻変動であった。確かにそれは新しい時代の到来を予告するものであった。

20 世紀を分岐点としてみるとき、去る世紀は一言でいって支配階級が勝手に歴史舞台を闊歩しながら「世界の主人」というベールをかぶって専横と略奪、搾取と抑圧をこととしていた世紀であった。

マケドニア王アレクサンドロスの東方遠征と古代ローマ統治者によるヨーロッパと小アジアの征服、中世の十字軍遠征、コロンブスによるアメリカ大陸の発見とそれによる資本主義列強の貪欲的な植民地争奪戦など、大小の征服戦争によって、世界の数億万の人民が搾取と抑圧のくびきをつけて喘いでいた。

その中でも 17－18 世紀コロンブスの新大陸の「発見」で始まった植民地開拓と、先を争って飛び込んだ資本主義列強の植民地争奪戦は、その程度や範囲において類例を見ない、支配者、略奪者の横暴さと野蛮さを見せるものであった。

このような残酷な悲劇は、19 世紀になっても無くならなかった。

しかし、20 世紀に入りながら、永遠な凍土帯のようであった支配と略奪の世界が揺れ始め、その地殻を抜け出る熱い火炎が激しく噴出し始めた。

その火炎の噴出は、社会主義 10 月革命、そしてその影響による植民地、半植民地諸国での民族解放闘争の急激な高揚であった。

以前のロシアでだけでなく、中国、インド、インドネシア、ベトナム、ミャンマー、フィリピンそして朝鮮など、アジア諸国でも反帝民族解放闘争の炎が激しく燃え上がり、世界はたちまち変革の坩堝に化した。

広範な人民大衆が立ち上がり、彼らの闘争が世界的範

囲で多様に行われていた壮大なこの現実、これはかつてなかった新しい変化であった。

もちろん過去にも、人民の闘争はあったが、それは一部の階級と階層だけが参加する程度で、その範囲も、一部の国、あるいは地方、個別的地域に限っていた。

労働者階級がはじめて歴史舞台に登場した 19 世紀にも都合は同じであった。

当時は発展したヨーロッパの一部の資本主義国で労働者階級だけが独自の政治勢力として歴史舞台に登場し、賃金労働と雇用制度といった、資本に反対する闘争を行っていた。

しかし 20 世紀にはいってからは状況が完全に変わった。

資本主義諸国の労働者階級だけでなく、植民地、半植民地諸国の数 100 万の人民も支配と従属、搾取と抑圧をそのまま甘受せずに闘争に決起し、それが一国、一地域の範囲を超えて世界的に広まっていた。特徴上、広範さと多様さを帯びて激烈に行われた人民大衆の革命的闘争と進出は、20 世紀を大きく揺るがした。

これに恐れをなした帝国主義者と世界の反動層は、人民大衆の革命的進出を阻もうとあらゆる策動をつくした。

大衆的な彼らの闘争は、正しい指導を受けていなかったため、多くの犠牲を出し、失敗と挫折の苦杯を飲み続けていた。

胸の痛い失敗と挫折によりひどい陣痛をなめていた20世紀の初め、人民大衆の大衆的な進出は、それを導く偉大な領袖の出現を切に求めていた。

いよいよ20世紀はそのような偉大な領袖を誕生させた。

自主時代に昇った偉大な太陽

歴史上20世紀が新しい世紀として、自主時代として変転してきた行程には、その開拓と前進のために献身してきた偉人たちの労苦が秘められている。

振りかえて見れば百数十年の共産主義運動史は、労働者階級の領袖たちが世界を変革させてきた歴史であった。

19 世紀の半ばに、マルクスとエンゲルスは、国際共産主義運動の始原を開き、レーニンは、資本主義から社会主義へと移行する端緒を開いた。

20世紀には朝鮮で偉大な金日成主席によって自主時代が立派に切り開かれた。自主時代の開拓、それは金日成主席が人類史上に積み上げた大きな功績である。主席は史上初めて自主時代を開拓し20世紀を自主で輝かした偉大な太陽である。太陽はその明るい光により偉大である。

金日成主席は、自主時代を切り開いた偉大な太陽としてその明るい光を世界に放った。

自主時代の偉大な太陽としての主席の偉人像は、チュチェ思想の創始で集中的に現れている。

金日成主席は、チュチェ思想を創始した 10 代の少年時期にもはや、1920 年代の後半期に新たに現れ始めていた国際情勢の流れを注意深く考察した。

勝利した社会主義 10 月革命の影響下で激しく展開されていた、労働者階級の革命闘争と植民地、半植民地諸国人民大衆の解放運動の急速な発展、特に暗黒の大陸、眠っている大陸と呼ばれていたアジア、アフリカ、ラテン・アメリカにおける民族解放運動の急速な高揚は、主席の注目を引いたのである。

全世界的範囲で行われる革命運動の広範さと多様さ、これは確かに、従来には見られなかった、新しい流れであったが、当時、非凡な英知の持ち主である金日成主席はそれを無心に見なかったのである。金日成主席の著作「朝鮮革命の進路」を見れば、主席が当時の内外の情勢を深く分析し、それを踏まえてチュチェ思想の基本、起点を確立したということがわかるようになる。

主席はこの著作で革命を勝利へと導くためには、人民大衆の中に入って彼らを組織、動員しなければならず、革命で提起されるすべての問題を他人に依存して解決しようとするのではなく、自らが責任を持って、自分の実情に即して自主的に解決しなければならないということについて言及した。

著作のこの部分は、その後偉大な金正日総書記の著作にも記されているように、チュチェ思想の二つの起点として定

義づけられた。

チュチェ思想が創始されたことにより人民大衆は、自分の運命を自主的に開拓する闘争の前途を照らす灯台を持つようになった。

20 世紀の歴史は主席が創始したチュチェ思想の要求通りに流れ、主席が起こした自主の熱風は歴史を自主の新しい歴史に変えていった。

もちろん自主時代を開拓する道は平坦な道ではなかった。世界の反動層は人民大衆の自主性をめざす闘争を阻もうと必死に足掻いた。

自主時代の偉大な指導思想、チュチェ思想を創始した偉大な金日成主席は、帝国主義者と反動層の悪辣な攻勢を打ち破りながら、自主時代を切り開くために献身的に活動した。

自主時代の開拓においてその担当者である人民大衆を自主時代の有力な勢力として作り上げるために力を傾けたことは主席の特筆すべき業績である。

全世界の自主化をめざす闘争における勝利の基本担保を世界の反帝自主勢力の強化に求めた主席は、非同盟諸国運動と社会主義運動をはじめとする反帝自主勢力を強化するようにした。

世界的範囲で形成された反帝自主勢力は、至る所で帝国主義者の侵略と干渉策動を打ち破るための闘争を激しく展開した。

それにより、20　世紀にアジア、アフリカ、ラテン・アメリカをはじめとして 5 大洋 6 大州には、自主の暴風が吹き始めた。

自主の暴風は、歴史的に譲られてきたあらゆる古いものを吹き払い、20　世紀を自主で沸き立つ創造と変革の世紀に変化させた。

植民地、半植民地諸国で民族の主体的勢力による民族解放革命の勝利、後進国での社会主義革命の勝利、帝国主義植民地体制の全面的崩壊と非同盟諸国運動の発展、反帝自主勢力の拡大強化、

これらは偉大な金日成主席が創始したチュチェ思想の正当さと生命力を実証するのである。

実に 20 世紀は偉大な金日成主席のエネルギッシュな活動によりチュチェ思想が立派に具現されて歴史の自主的軌道がつくられ、それに沿って加速的な前進を遂げ、世界の面貌と時代の内容が根本的に変わった世紀であった。

それゆえ、世界の進歩的人類は、主席を「20 世紀―自主時代の偉大な太陽」と高くたたえ、限りなく敬慕しているのである。

「国際金日成賞」の制定は、主席にたいする世界の進歩的人民の強烈な敬慕の情の発現であった。チュチェ思想の研究者たちと世界の自主化偉業に寄与した進歩的人士たちに授与する、最高の国際賞である「国際金日成賞」は、偉大な金日成主席の生誕 81 周年であった 1993 年 4 月 13 日に制定

された。「国際金日成賞」が制定されたことは、現代の最も傑出した思想理論家であり、世界の平和と人類の自主偉業の遂行に特出した貢献をなさった偉人中の偉人である金日成主席の業績を万代に輝かせていくうえで大きな歴史的意義を持つ。

朝鮮人民はチュチェ年号を制定して主席の誕生日をチュチェ時代、自主時代の元年として歴史の年輪に記し、主席を錦繍山太陽宮殿に永生の姿で安置した。

主席が指し示した自主の軌道に従って流れてきた 20 世紀は、自主時代を切り開いた新しい時代として人類の歴史の一ページに刻まれている。

偉大な金日成主席が切り開いた20世紀、自主の世紀は、金正日総書記によってより輝くようになった。

「平壌宣言」

20 世紀が暮れてゆく1990 年代は、人民大衆の自主偉業、社会主義偉業が、一時的に試練をなめていた厳しい時期であった。それは自主偉業の高い段階である社会主義は、帝国主義者と反動層の悪辣な反社会主義的策動により陣痛をなめていたからである。

新しいものの誕生と勝利は陣痛をなめるはずである。

社会主義が出現すると帝国主義者と世界の反動は社会主義の影響力を去勢し、それを抹殺するためにあらゆる術策

をつくした。

社会主義諸国にたいする経済的制裁と封鎖をしたり、しつこい心理瓦解策動を行ったり、核兵器を振りかざしながら侵略と戦争策動をこととしたりした。彼らは生々発展していた社会主義に大きな危惧を感じていた。

去る世紀、社会主義は大きな波及力を持って世界的範囲で実現され、社会主義体制にまで強化された。

一時期、地球上では世界人口27億のうち約10億がすでに社会主義の道に入っていたし、世界領土の4分の1を占める広大な地域に社会主義の旗が靡いていた。

このように大行進曲を歌いながら前進していた社会主義の陣営内で、20 世紀の最後の年代を超えながら一つの大きな悲劇的事態が発生した。それは社会主義の挫折と崩壊であった。

もちろんこれはその真相を解剖してみれば、社会主義を変質させた社会主義の背信者によって招来された結果であった。

にもかかわらず事態の真相を見極めない少なからぬ人々は、これを20世紀の「地殻変動」、第2次世界大戦後もっとも深刻な「大動乱」と描写しながら、あたかも資本主義滅亡の不可避性と社会主義勝利の必然性が誤っていたかのように認識し始めた。

世界的にこの事態を置いて論議が紛々とし混乱に陥って

いた、この時期に便乗して、資本主義の弁護論者たちは「社会主義の終焉」を喧伝した。

社会主義が挫折するかいなかという厳しい歴史的時期に、歴史の運命、社会主義の運命、人民大衆の運命を救う道に出た方は、朝鮮の偉大な指導者金正日総書記であった。

全世界の進歩的人民は、総書記に社会主義の運命を全的に依託した。

これについてロシア・パレヤ出版社社長ニコライ・ミシンは次のように書いている。

「実に 20 世紀から 21 世紀の境目に至って歴史は、朝鮮人民の偉大な息子である金正日同志に、全世界の社会主義の運命にたいする最も重い責任を負わせたのである。」

人類の自主偉業、社会主義偉業を危機から救い出し、力強く導いていく歴史の大業を引き受けた総書記は、社会主義のハンドルをしっかりと捉えてその前進のための知略を指し示した。

総書記は挫折した社会主義を再建する活動の現状を科学的に診断することから始めた。

病の社会主義を治すためには、社会主義の現状を正確に診断しなければならなかった。

総書記は社会主義と関連した歴史的な古典的著作を連続的に発表し、社会主義の挫折と崩壊について騒いでいる反動層の悪宣伝をぶち壊して、社会主義を志向する世界の

進歩的人民に社会主義への新しい方向と科学的な方途を提示した。

「**社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線**」、「**社会主義にたいする誹謗は許されない**」など、金正日総書記は古典的著作を連続的に発表することにより、世界の進歩的人民の胸を再び社会主義の熱気で温め、帝国主義者と反動層を戦慄させた。

社会主義が崩壊した根本原因にたいする総書記の指摘はまたどんなに至当なのだろう。

総書記は著作で事の成否の原因は主体に求め、なすべきことは客観に求めるべきであるという偉大な金日成主席の言葉を上げながら、社会主義が崩壊した根本原因は主体を強化し、その役割を高めなかったことにあると明快に指摘した。

金正日総書記は次のように述べている。

「**社会主義を建設していた一部の国で社会主義が挫折した根本的な原因は、一言でいって、社会主義の本質を歴史の主体である人民大衆を中心にして理解していなかったために、社会主義建設における主体の強化と主体の役割の向上の問題を基本としてとらえることができなかったところにあります。**」

これは社会主義の生命力が何にあるかという、明哲な言葉である。

偉大な金正日総書記は社会主義建設の主体にかんする問題だけでなく、その建設で堅持すべき根本的原則と方途をはじめ、社会主義建設とその発展完成の過程で提起されるすべての問題をみな明らかにした。著作が発表されるやいなや世界は社会主義にたいする新しい熱気で沸き立ち、進歩的人民は社会主義を再建する闘争を力強く行い始めた。

このような実態を見て総書記は社会主義の正当さと科学性、その勝利の必然性を確信した。

一部の国において社会主義は挫折したが、科学としての社会主義は依然として人民の心に生きている。

社会主義は日和見主義によって一時的に胸の痛い曲折をなめてはいるが、その科学性、真理性からして必ず再生し、最終的勝利を遂げるであろう。

社会主義偉業の勝利にたいする確信をもっと打ち固めた金正日総書記は、歴史的な著作「**社会主義は科学である**」を発表して科学としての社会主義の本質とその勝利の必然性を鉄の論理で論証した。

社会主義を危機から救い、その勝利をめざす新たな進路を解明するための総書記のエネルギッシュな活動はこれだけではなかった。

社会主義を志向する世界の進歩的人民の大きな志向と念願がそのまま反映された歴史的な「平壌宣言」が採択されたのは、人民大衆の自主偉業に積み上げた総書記のいまひ

とつの特筆すべき歴史的業績であると言える。

「平壌宣言」は「社会主義偉業を擁護し前進させよう」という題目で、社会主義を志向する世界の進歩的人士たちと人民の大きな期待と関心の中、1992 年 4 月 20 日に平壌で発表された。

「平壌宣言」は、社会主義は人類の理想であり、人類の未来を代表する社会、真の人民の社会であることを確認した、歴史的な宣言であった。

「平壌宣言」が発表されるや世界の進歩的政党は、この宣言を「社会主義を志向する政党と人民の念願を反映した闘争の旗じるし」、「国際共産主義運動の統一団結の旗じるし」、「第 2 共産党宣言」だと高く評価しながら、我先に宣言に署名した。2012 年 4 月、当時、平壌宣言に署名した政党の数はほぼ 289もあった。

20 世紀の自主偉業の偉大な指導者である金正日総書記の業績について語るとき、朝鮮に一心団結した不敗の社会主義朝鮮を立ち上げたことについて指摘せざるを得ない。

総書記は朝鮮で人類が理想として描いていた社会主義のモデルを創造し、先軍政治で社会主義を守って自主の命脈をしっかりと引き継がせた。

自主の新しい時代、歴史の新しい時代の偉大な申し子は社会主義朝鮮であった。

4）自主的な主体の真の姿—朝鮮の偉大な一心団結

今まで自主の世紀、20 世紀の偉大な申し子—社会主義についてみた。ならびに歴史の自主的な主体も、20 世紀—自主時代の偉大な産物として歴史に刻まれた。

歴史の自主的な主体、

歴史の自主的な主体は、人民大衆が自分の運命を自主的に創造的に切り開いていく過程で形成され、最も意識化され組織化された集団である。歴史の自主的な主体は、領袖、党、大衆が一つの組織的、思想的統一体をなした、社会的集団である。

最も有力な社会的集団として自らの固有の生命力を持って歴史舞台に始めて登場したこの集団は、その威力においてどの集団にも比べることができない。

強い組織力と高い思想精神的面貌においてその類例を見ないこの集団の原型は、社会主義朝鮮である。

朝鮮の社会主義は、今まで人類史が見たことのないまったく新しい世界、全社会が領袖を父親としていただき一つの大家庭をなしている社会主義である。

朝鮮の社会主義の威力、強固さの基礎となっている、領袖、党、大衆の統一体、 社会的･政治的生命体とも呼ぶ、こ

の統一体について知らずには朝鮮について知っているといえない。

これを「特許武器」といってよいか、「宝箱」といってよいかは読者の判断にお任せするが、とにかく朝鮮式社会主義のすべての成果の秘訣はこれにある。

朝鮮の市民パレード

朝鮮を訪問して朝鮮の市民パレードを見た外国人たちは普通、その威力に驚きを隠せない。

朝鮮で市民のパレードは、めでたい祝日である太陽節と共和国創建記念日、党創建記念日、建軍節など意義深い時期を契機にして大盛況裏に行われる。

一般的にパレードはどの国でも行いうるが、朝鮮の市民パレードはその規模と様相においてまったく特異なものである。

激情の涙を流し、子供のように小躍りしながら喉が裂けんばかりに万歳の歓呼をあげながら幹部壇の前を通る群衆。満面に微笑を浮かべて、手を振りながらそれに情熱的に応対する指導者。

筆舌に尽くしがたい、指導者と人民が互いに情を交わす、この目頭も熱くなる光景、指導者にたいする熱烈な欽慕の情を声限りに打ち明ける群衆の熱烈な歓呼が広場中に響き、欽慕と激情の海をなす。

領袖と人民間の関係がいかに熱く、熱烈なものであるかを見せる崇高なものである。

指導者を中心とする統一団結のこの絵巻を見て世界の人々は一様に感嘆し羨みながら、領袖と人民がどのようにしてあんなに熱く結合されているだろうか、その秘訣が何であろうかと聞いたりする。

領袖、党、大衆の統一体

その秘訣を知るには、朝鮮の領袖、党、大衆の統一体について知らなければならない。

朝鮮には世界のどの国にもない、領袖、党、大衆の統一体がある。

領袖、党、大衆の統一体とは、領袖、党、大衆が思想・意志的に及び、組織的に、そして道徳・信義的に固く結集している集団を言う。領袖、党、大衆の統一体は革命の自主的な主体とも表現され、それが一つの運命共同体であるという意味で社会的・政治的生命体とも表現されている。

朝鮮人民にはあまりにも平凡なこの言葉の意味を、外国の人々が理解するにはやや難しい点があるようで、これについてもっと具体的に話していこう。

ここにひとつのエピソードがある。

1993 年 5 月、朝鮮を訪問した外国のある人士が偉大な金日成主席と会見した。

話題は新しい社会建設と関連したものであった。

主席は朝鮮の諺に「大将一人で戦はできぬ」という言葉があるが、新しい社会を建設するためには、党から強化して中核を育成し、1人が10人、10人が100人、100人が1千人、1千人が万人を育成する方法で大衆を党の周りに固く団結させなければならないと言いながら、新しい社会の建設における諸問題を具体的に話した。

談話の途中、主席はテーブルの上にある桃を指しながら、領袖、党、大衆がこの桃で例えて言えば、果肉は人民大衆で桃の種は党であり、その核は領袖であると例えた。

物事の理は、対比考察の中でもっと明確に理解されるものである。それこそいい例えであった。

金日成主席は、わが国には領袖、党、大衆が一心団結している、領袖がいなければいけない、党だけあってもいけず領袖がいなければ、ミツバチの中にも女王蜂があり、ありの中にも女王蟻がある、党はあくまでも桃の様につくるべきであると言った。

続けて主席は、わが国は領袖、党、大衆が一心団結しているため、アメリカがいくら脅かしても微動だにしない、団結してこそ国が滅びない、国が滅びればみんな乞食になってしまうと意味深長な話をした。

団結は必ず核のある団結に、党はあくまでも桃のように、

吟味すればするほど深奥な意味の込められたお話であった。

領袖、党、大衆が一心で団結している領袖、党、大衆の統一体、それは一つの中心と中枢によって統一され、革命的信義と同志愛の原理によって結合した、全一的な集団である。その中心は領袖である。

世界の万物が核を中心にしてなされ、運動、発展するように、統一団結をなすうえでも核のような中心がなければならない。まさに指導者、領袖が統一団結の中心となっている。

領袖はこの集団の中心、最高頭脳の位置で、社会的集団の統一団結を保障しながら、その生命活動を統一的に指揮している。

一方、党は、領袖を中心にして組織的、思想的に強固に結合した人民大衆の中核部隊として、この統一体で中枢の位置にある。

領袖と党が中心、中枢となって一つの統一体をなし血縁的に結ばれた領袖、党、大衆の統一体は、強い生命力、自主的な生命力を持っている。

金正日総書記は次のように述べている。

「人民大衆は、党の指導のもと領袖を中心に組織的、思想的に結束することにより、不滅の自主的な生命力をもつ一つの社会的政治的生命体をなします。」

今日、朝鮮で実現している領袖、党、大衆の統一体は、一心団結の強固さ、人民大衆の自主性の実現における完璧さからして、社会的・政治的集団の典型となっている。

社会的・政治的生命体は、一つの空虚な理論としてではなく、朝鮮に現実として実現されている。

朝鮮は一つの大家庭

一般的に人々は家庭というと、身近な血肉が集まって生きる社会の細胞であると考える。

朝鮮人民は「わが領袖」、「わが将軍」、「母なる党」、「わが党」、「わが人民」、「一つの大家庭」という言葉をよく使う。

言い換えれば、領袖もわれわれの領袖であり、党もわれわれの党であって、人民もわれわれの人民というのである。

そもそも「わが」、「家庭」、「母親」という言葉は、父母と子供という最も親しい血肉の関係でよく使われている言葉である。しかし朝鮮人民が使っている「わが」、「家庭」、「母親」という言葉は、指導者と人民間に通用される、一家庭の範囲を超えた親しい意味のものである。

領袖と人民間の関係が家庭内での父母と子供の間のように、血縁的に、親しく結ばれた朝鮮のこうした現実は、世界のどの国でも見ることのできない独特なものである。

個人主義に基づいて弱肉強食、適者生存の法則が乱舞する資本主義世界とはあまりにも対照されるこの光景は朝鮮のどこでも目にすることである。

朝鮮人民は自分の指導者を父親と呼びながら、心から尊敬している。主席と総書記の肖像画を家の中にも丁重に掲げ

て生活し、思いがけない自然災害にあったときも自らの命や財産より先に肖像画の安全について気を使う。

それだけでない。身寄りのいない老人たちと障害者、親をなくした子供たちを引き受けて一家族のように暮らす人々が数え切れないほどであり、作業中不意の状況で危ない時にも自分を犠牲にして同志たちを救援する、美しい行いの主人公もまたたくさんいる。

世界的に、多くの国が民族紛争、宗教紛争、領土紛争によって混乱と崩壊に直面していても、朝鮮では何の社会的動乱や混乱も起こっていない。

朝鮮の現実は、領袖、党、大衆の統一体—社会的・政治的生命体が生んだ貴重な結実である。

その偉大な統一体があって、東方の小さな国—朝鮮、過去「弱小国」と呼ばれてきた朝鮮が社会主義強盛国家として浮上しており、また最近年は宇宙の征服で世界の政治を変化させている。

朝鮮人民がこのように領袖を父親としていただき、みんなが一つの大家庭をなしているがゆえに、多くの国が政治、経済的危機により陣痛と曲折を経ていても朝鮮ではすべてのことがスムーズに前進しているのである。

一心団結の威力

一心団結の中に朝鮮のすべての威力がある。

金正日総書記は次のように述べている。

「いかなる風雨のなかでもわが国の社会主義が微動だにしないのは、領袖、党、大衆の一心団結が確固としたものとなり、人民大衆が党と領袖の指導のもとに各自の自主的要求に従って新しい生活を創造しているからである。」

国家の強大さは、領土の大きさや人口数にかかっている問題ではない。

早くもユゴー・ウィクトルは、「人間の偉大さが彼の背だけによらないように、人民の偉大さは人口数によらない。」といった。

一般的に強国になるためには何よりも政治が有力でなければならない。

言い換えれば、政治強国になるべきである。

それは政治が経済、軍事、文化を包括する社会の全般を左右する決定的意義を持つ分野だということと関連する。こういうところから、経済や軍事の分野において大国になろうとしても政治においてまず大国の面貌を備えなければならない。政治が有力でなければ経済や軍事も力を発揮できない。

朝鮮はすでに政治思想強国となっており、それに基づいて軍事強国に転換され、今日には経済強国を目指して前進している。これは世界が公認している事実である。

すると朝鮮が政治強国となった秘訣はどこにあるのか。

チュチェ思想は、政治強国になるためには領袖、党、大

衆が統一していなければならないと明らかにした。

すなわち領袖、党、大衆の統一体は、政治強国であるということである。

これは領袖、党、大衆が思想と意志が一つに統一された全一体になってこそ政治強国になれるということである。

政治強国としての朝鮮の面貌、威容は、領袖、党、大衆の一心団結ではっきりと現れている。

領袖、党、大衆の一心団結、それは核兵器よりもっと有力な武器である。

金正日総書記は次のように述べている。

「このたび、金日成同志の生誕八〇周年慶祝行事に参加した世界各国の友人たちは、党と領袖のまわりに固く団結した朝鮮人民の一心団結の威力を見て、この力は原子爆弾よりも威力があるといって、非常に羨んでいました。」

20 世紀の 40 年代の半ば、原子爆弾が開発された時、世界はその威力に驚いた。それは出現後、世界を大きく脅かした。それで世界各国ではその兵器を手に入れようと努力した。

核兵器を持たなかった国々は、それを持っている国々の威嚇と恐喝に恐れをなし、一つ、二つと屈し始めた。ここでは大きな国も例外ではなかった。

しかし朝鮮は一心団結という「武器」でこれに対抗した。

一心団結の威力で傲慢な帝国主義の強敵であるアメリカ

を打ち破った朝鮮人民は、 社会主義革命を成功裏に遂行し、1990 年代には、他の国で社会主義が挫折、崩壊して帝国主義者の専横が極度にいたっていた厳しい中でも反米対決戦で朝鮮式社会主義を固守し、強盛国家をめざして前進しつつある。

朝鮮を社会のすべての分野で強国の地位に至らしめたその一心団結は、世界の注意を集めている。

「チュチェ思想はまさに、主体の運動としての社会的・歴史的運動固有の合法則性を解明しました。チュチェ思想が解明した社会・歴史観は社会的・歴史的運動固有の合法則性を基本的内容としています」

金 正 日

3. 社会は人民大衆が切り開く道に沿って前進する

ここでは歴史の主体として押したてた人民大衆が、歴史を切り開きながらその道をどのように前進するかについてお話しようと思う。

チュチェ思想は、人民大衆が社会・歴史の主体という原理に基づいて、社会的・歴史的運動が人民大衆の自主的で創造的で、意識的な運動であることを明らかにしている。これは社会的・歴史的運動の本質と性格、推進力を明らかにしたことであり、ならびに自然の運動と区別される主体の運動としての社会的・歴史的運動の固有の合法則性を解明したことである。

社会・歴史がその固有の合法則性によって自主的で創造的な道に沿って目的意識的に前進していく、これは人類が始めて接した新しい原理である。チュチェ思想の独創性はここでも現れている。

1）社会的運動の固有の合法則性にしたがって

私たちは金正日総書記の著作を読む過程で「**社会的運**

動はそれに固有な合法則性にしたがって変化、発展します。」という文章をよく目にする。

短い文章ではあるが、これには人類社会、人類歴史に対する独創的な解明が与えられている。

凡そこの世の万物は、みなそれに固有な法則を持っており、それにしたがって変化、発展する。

法則に即した変化発展、これはこの世のすべての事象がもっている普遍的な特性である。

自然にも、社会にも法則があり、人間の活動にも法則がある。

自然界には万有引力法則と化学元素周期法則のような無生物世界の法則、メンデルの遺伝法則のような生物世界の法則がある。

社会も世界の一部分であるため、自然でのように固有な変化、発展の法則がある。

かつて一部の人たちは自然にだけ法則があると一面的に考えながら、社会でのいかなる法則の作用も否定した。

あるのはただ一個人の気まぐれや恣意的な判断があるだけだといいながら、ある学者は古代エジプトの女王クレオパトラの鼻がもう少し低かったら、ヨーロッパの歴史は変わっていたでしょうとまで言い、ある人はある后妃の消化不良症とか、気まぐれが戦争のような出来事を起こしうる十分な要因になるといった。

しかし社会的・歴史的運動過程は決して特定の個人の気まぐれや恣意的な意思によってこうにもああにもなりうる、偶然的出来事の累積ではない。

歴史がなんの法則性もなく、まったく偶然的にこうにもなりえ、ああにもなりえるなら、どのようにして東西を問わずに多くの国々が類似の発展段階を経ながら今日に至ったのであろうか。これが偶然的な一致であろうか。そうではない。

もちろん社会では事件や出来事が相次いで起こり、これに数多くの人々が関与することからして、その変化が非常に複雑であるのは事実だが、社会には動かしがたい歴史的必然性、法則があり、社会はこうした必然性、一定の法則の統制を受けているのである。

では社会を統制する法則、それはどういうものであるのか。

チュチェ思想は、それがチュチェの運動法則であると教えている。

社会・歴史に主体があるということについてはすでに前でお話した。

社会・歴史に主体があるがゆえに、社会のすべての事物現象は、主体との相互連関の中で作用する。

社会のすべての事物現象の主体との相互作用、これは社会的運動でのみ見られる固有の現象である。

反面、自然には主体がないため、こうした特性がない。

自然には客観的に存在する物質があるだけであり、自然

はそれらの相互作用によって変化、発展する。

自然に客観的に存在する物質は、相互作用の過程でさまざまな運動法則、言い換えれば、力学的運動法則、物理的運動法則、化学的運動法則、生物学的運動法則を生んでいる。こうした運動法則によって自然は自然発生的に変化、発展するようになる。

客観的に存在する物質の相互作用によって自然発生的になされる自然の運動とは異なり、社会的・歴史的運動にはこの運動を主動的に導いていく主体があり、それによって合法則的に変化発展するようになる。

その過程を簡単に見ていこう。

社会では世界を支配、改造し、自己の運命を開拓するための人々の積極的な活動が行われている。

それは大きく、三つの領域に分けられるが、自然改造、社会改造、人間改造がそれである。

人間は何よりもまず、客観的な物質世界にたいする支配と改造を実現するために自然改造を行い、その過程で物質的財貨を創造して物質的生活条件を整える。人々が生きていくためには自然を利用する以外に方法がない。自然をよく利用するということはすなわち自然を改造していくことを意味する。自然を改造して物質的富を創造する活動は、人々の社会的需要を満たせるための活動であり、それは人々の間の社会的協力を通じてのみ実現することができる。社会的協力

関係は固定不変なものではなく、歴史が前進するにつれて不断に完成しなければならない。

人々は社会改造を通じて社会的協力関係を改善し、完成していく。

自然を改造するのも人民大衆、社会を改造するのも人民大衆である。人民大衆は自然と社会を改造する活動を行いながら自分自身を絶えず改造し、発展させていく。人民大衆による世界の支配と改造は結局、自然改造、社会改造、人間改造を通じて実現され、人民大衆はそれらの改造の主体となる。

人民大衆は社会的運動の主体として社会のすべての物質的・文化的財貨を創造し、社会関係を発展させ、この過程で歴史の主体としての自らの主動的作用と役割を全うするようになる。

人民大衆のこうした主動的作用と役割がなされる過程で社会には自然にはない独特な合法則的現象が現れるが、これをさしてチュチェ思想は、社会的運動の固有の合法則性であるという。

チュチェ思想ではこの法則が社会にのみ作用して自然にはないと見ながら、自然の運動は客観的に存在する物質の相互作用によって自然発生的になされるが、社会的運動は主体の主動的な作用と役割によって発生、発展するという。こうしたことからしてチュチェ思想では主体の主動的

な作用と役割による社会的運動法則をただ社会的運動の合法則性とばかり言わないで「固有の」という言葉をつけて、社会的運動の固有の合法則性と言うのである。

まさに社会・歴史は人民大衆によって行われる社会的運動の固有の合法則性が作用する方向で発展する。

では社会的運動にのみ作用する固有の合法則性によって社会・歴史がどの道をどのように進むのか。チュチェ思想は社会・歴史が自主の道に沿って、創造的性格を帯びて目的意識的に発展していくと明らかにした。

ではそれについて一つ一つ見ていこう。

2）歴史が進む道は自主の道

社会的運動の固有の合法則性について語るとき、まず、社会的運動は人民大衆の自主的運動であると言うことからみるべきである。

金正日総書記は次のように述べている。

「人類の社会発展史は自主性を擁護し実現する人民大衆の闘争史です。」

社会・歴史は本質において人民大衆の自主性を実現するための闘争の歴史である。それゆえ社会的・歴史的運動は自主的運動という特性を持つようになる。

社会的・歴史的運動が、人民大衆の自主的運動であると

いうこの原理は、歴史の主体である人民大衆を中心にすえて社会的・歴史的運動を考察したチュチェの社会歴史観の主要原理である。

振りかえてみればこの世のすべての生命体は、それに固有の生存方式、生存法則に即した道を持っており、その道は数え切れないほど多い。

その数千数万の道は、その模様と形態、種類がまちまちである。

たとえば、季節が変わればがんやツバメのような渡り鳥は、温かい棲み処を訪ねて遠い道へと発ち、魚も海流にしたがって棲み処を移したりする。

それだけでなく巨視世界である宇宙の多くの星は自らの天体軌道をもっており、微視世界の小さな微粒子も電子軌道を持っている。

このように世界に存在する多くの事物はそれぞれ、定められた道に沿って動き、その途上で発生、成長、消滅しながら絶えず変化していく。

数十億年間、広大無辺の自然の道にしたがっていく過程で多くの有形無形の物質が出現したり、永遠になくなったりもした。自然界の道がいくら多様であるといってもそれは自然に順応する道以外になんでもない。

自然界でのように人間社会にも道がある。

多くの人が世の中の風波をかき分けながら歩んで行った

人生の道もあり、社会・歴史が流れてきながら残した歴史の道、そして人間が自然を征服する過程でつくられた自然開拓の道もある。

人間社会が行く道はその主体である人民大衆が開いていく道として、それは環境と条件にただ順応する道ではなく、その従属に反対していく道、自主の道である。

自主性は人民大衆の本性的要求であり、それゆえ社会・歴史は人民大衆が要求する方向、自主性が実現される方向へと進むに決まっている。

人民大衆は社会・歴史を切り開いた初の日から自然界の存在のように自然の条件と環境にただ順応ばかりしようとせず、それとは異なって、あらゆる束縛と従属に反対してたたかってきた。

この過程で人民大衆は世界になかった新しい道、自主の道を開き、その道に沿って自分の運命を切り開いている。

それでは歴史の主体である人民大衆が切り開いた道、自主の道はどのようにしてつくられるようになったのか。それは彼らが抱いていた世紀的念願にその端をおいている。

世紀的念願

人間は社会をつくりながら、多くの夢、念願を持つようになったが、自主の念願は社会が階級に分かれ搾取する者と搾取される者が生まれながらもっと強烈になり始めた。階級社

会が存在した全期間、人民大衆が抱いていた念願の中、もっとも強烈なのは自主の念願であった。

自主の念願は歴史と自己の運命の主人として生き、発展しようという人民大衆の崇高な念願である。

それは、他人を支配したり、他人に屈従し、また自主権を蹂躙されながらまで卑屈に妥協したりするようなこととまったく縁がない。

金日成主席は生前にこの世に他人に従属して生きるのを好む人はいないと言っている。

かつてインドで独立運動が盛んに行われていたときある独立運動家はこういう質問を受けたという。イギリスがインドから手を離すとインドの人々はもっと困難な生活をするようになるであろうが、それでも独立する必要があるのか？その独立運動家は、かりに私たちが裕福な生活ができないとしても、私たちだけで暮らすのがいいからイギリスはインドで出て行けといったという。

この世のどの国や民族であろうが、ひとえに願うのは自主であって、従属ではないということを感じるようになる。

自主の念願はそれを実現する理想社会を立てようという、強烈な志向である。

人民大衆は早くから自主の道を歩みながら自らの自主性を貴重にし、それを真実に実現してくれる社会、あらゆる搾取と抑圧のない、すべての人々が平等で互いにむつまじく生き

ていく理想社会を描いてみた。

従属と抑圧がなく、自由で幸せに生きようという念願を実現しようと、人民大衆は時には、神仙の国へも行ってみようとし、神の天国を仰ぎながら宗教的安息を求めてみようともした。

「理想国」だの「天国」だのというものもみな荒唐無稽な夢に過ぎなかったし、そこには善良な神仙や、慈悲深い神様ではなく、その仮面をかぶった搾取者、支配者が君臨していた。

それで人民大衆はこれらすべてが悪いということを悟り、搾取階級と制度に反対してたたかってきたのである。

人民大衆の自主の念願は、人間であるなら誰もが持つ共通の念願であるだけでなく、歳月が流れるほどより強烈になる念願である。

数千年の間、世の中の風波に当たり試練をなめながらもその念願は歴史のながれとともにより強烈になった。

かつて搾取階級は、その人民大衆の自主への念願を抑えようと手段と方法をいとわなかった。甘言利説でなだめたりそれが聞かなければ暴力的方法を使ったり、人民大衆を封建社会、資本主義社会へと引っ張って行ったりもした。しかしすべての試みは、彼らの自主の念願に合わないことからして否定され、人民大衆の激しい自主的闘争によって無実になったりした。

人民大衆の自主の念願はこのように支配と従属を許さず、社会の進歩をめざす闘争のなかでより強烈になる。

チュチェ思想はこの人民大衆が願ってやまなかった自主の念願を貴重にし、それを自らの思想理論の中心にすえてそれを実現することを自らの根本使命として押し立てた。

だけでなく自主性を実現するための道、社会主義への道までも科学的に解明している。そのことからしてチュチェ思想は自主の思想としてさらに世界に光を放つようになり、今日には全世界の進歩的人民が熱烈に信奉する世界的な思想となったのである。チュチェ思想が今日、急速に伝播されている秘訣の一つがここにある。

今世界的にチュチェ思想研究組織と信奉者隊列は引き続き拡大されており、多くの国の人民が自主性を求めて力強くたたかっているのはその確証である。

チュチェ思想が指し示す道、自主の道に沿って進むのは今日、阻むことのできない時代の流れとなっている。

社会改造に自主の活路がある

ここでは人民大衆の自主性をめざす闘争の領域とその相互関係について解説しようとする。

自主の道は決して平坦な大道ではない。この道には厳しい自然の束縛もあり、不合理な社会制度の束縛もあり、人民大衆自身が持っている思想的、文化的桎梏もある。

人民大衆はこのような自然と社会、自分自身の束縛に反対して自主性を実現するために、この 3 つの分野でそれを実現するための闘争を展開するようになる。

社会を改造する闘争を通じて人民大衆は階級的および民族的従属から脱して社会的･政治的自主性を実現し、自然と人間を改造する闘争を通じて人民大衆は自然の束縛と古い思想、文化の束縛から脱して自主的な生活を享受しうる、物質的および思想、文化的条件をつくるようになる。

歴史的事実は、人民大衆が行うすべての形態の社会的運動が自主性を実現するための運動であることをはっきりと見せている。

史上自主性をめざす被抑圧勤労大衆の初の進出といえる奴隷暴動と中世の農民たちの反封建闘争により、奴隷制度と封建制度が崩壊して勤労人民大衆の自主性をめざす闘争では大きな前進がなされた。一方自然改造、人間改造のための闘争を通じて物質的財貨と思想、文化的財貨が多く蓄積され、蒙昧と無知から遥かに脱するようになった。

このように自然と社会と人間を改造するためのすべての社会的運動が、人民大衆の自主的志向と要求を実現することを志向してきた。

ではこの 3 大改造はどういう順次性、方式で行われるようになるのか。

3 大改造は社会的･歴史的実践の要求に即した一連の

順次性を持って行われる。

3 大改造の順次性は、それぞれの歴史的時代と当該の社会が処した環境を考慮して定めなければならない。

時代と環境を考慮せずにただ自然改造、人間改造、社会改造がみな同時に行われるとか、機械的にどの一つが完全に終わってから他の改造が行われると見てもならない。

社会発展の実践的過程としての社会主義を建設する問題を設定して考察してみよう。

社会主義革命を行う時期には搾取と抑圧を一掃して人民大衆の社会的・政治的自主性を実現する問題、言い換えれば、社会改造問題が前面に出るようになる。

それは搾取社会には人民大衆の自主性を蹂躙する主な桎梏、階級的および民族的支配と従属があったからである。

支配と従属の社会関係が一掃されずには自然改造の担当者である人民大衆が、自分の労働の結果を享受することのできない境遇におかれるようになる。人民大衆は社会的・政治的に束縛されている状態では、いかなる自然改造活動にも関心を持たなくなる。したがって優先的な活動は、社会改造のための社会革命を行うべきとの結論に帰着するようになる。

社会革命により搾取制度が一掃され、進歩的な社会制度、社会主義制度が確立されれば、自然改造、人間改造により有利な条件がつくられるようになる。

社会主義社会では社会のすべての構成員が等しく国家

と社会の主人となっており、それによって同志的協力と団結が社会関係の基本となる。

搾取社会が覆され、社会主義社会が樹立すれば、支配階級、搾取階級が階級として一掃されて階級的対立がなくなり、親善的な二つの階級である労働者階級と農民をはじめとする社会のすべての勤労者たちが、ともに社会主義的勤労者として互いに利害関係が一致するようになり、したがって、同志的協力と団結がなされるようになる。

これは、人民大衆が自然改造、人間改造の課題を前面に提起して遂行するのに有利な条件となる。

ここで金日成主席が外国の友人たちとあって交わしたお話を一つ紹介しよう。

1981 年 10 月中旬、アジア地域チュチェ思想研究所の所長、ティ・ビ・ムケルジを団長とするインド学者代表団を会見した際、金日成主席は、アジア諸国は産業革命をしなかったため、ヨーロッパ諸国より立ち遅れるようになった、そのため結局は、発展した諸国の植民地になってしまったといわれた。主席は続けてその原因にたいする彼の質問に、かつてアジア諸国が産業革命をしなかったのは、封建統治制度があまりにも強かったためである。言い換えれば、強い封建統治制度が人々の創意性を強く抑制したことにあると謹厳な語調で言った。

強い封建統治制度による人々の創意性の抑制、

かつてアジア諸国が世界的な流れから立ち遅れるように

なった原因を一言で明哲に分析する主席の話に、ムケルジは歓声でも上げたい気持ちになった。

主席が言われたように、社会改造は自然改造、人間改造の活路を開く関門であるといえる。社会を改造してこそ自然改造、人間改造が何の社会的束縛も受けずに有利に行われる。

社会改造は根本において社会主義革命である。それは社会主義革命を除いたその以前のどの革命も、自然改造と人間改造を立派に行っていくだけの条件と環境を保障することができなかったからである。封建制度はいうまでもなく、資本主義社会も人々を堕落させ、自然環境を破壊することによりその改造と発展の道をさえぎる。社会主義だけがそれに有利な環境と条件を保障してくれる。

社会主義制度が樹立した後、自然改造と人間改造は、思想、技術、文化の 3 大革命を通じて遂行され、社会改造は革命的な方法ではなく、社会主義制度を強固、発展させる方法で行われる。

時代の流れ、全世界の自主化

今日、人民大衆の自主性をめざす闘争は一つの時代的な流れとなった。

金日成主席は次のように述べている。

「現代は自主性の時代です。かつて抑圧され、さげすまれた人民が世界の主人として登場し、歴史を力強くおし進め

ており、自主性のはげしい潮流が世界の全大陸に打ち寄せています。人民が自主性を要求し、自主の道に進むのは現代の基本的すう勢です。」

現代は自主性の時代、

自主の道は現代の基本趨勢。

現代歴史の本質的特徴を見極めた主席の指摘は実に正しい。

実際、現代の歴史を見れば、民族国家をなしている今日の世界で、すべての国と民族が自主性を志向しており、世界的範囲で自主性をめざす闘争が激しく展開されている。

早くからマルクスによって切り開かれた労働者階級をはじめとする被抑圧人民大衆の解放偉業は、20 世紀にいたって、新しい段階に入った。その後、マルクスの偉業に忠実であったレーニンは、レーニン主義を打ち出し、その旗のもとに社会主義10月革命を導き、地球上に初の社会主義国家を打ち立てた。

社会主義が出現して今日に至る間、紆余曲折はあったが自主偉業、社会主義偉業は勝利のうちに前進し、世界的範囲で植民地体制が崩壊され、人民大衆の自主的要求を具現した反帝民族解放運動と非同盟運動、世界平和愛好運動がより幅広く、深みをもって展開されてきた。

現代は人民大衆の志向と歴史の流れに逆行する帝国主義に有利であるのではなく、帝国主義の滅亡が近づき、世界

人民が自主の道に沿って力強く前進している、歴史的な転換の時代である。

帝国主義、支配主義勢力が世界を意のままに牛耳る時代は、永遠に過ぎ去った。

今日、世界情勢の流れを主導するのは、あらゆる搾取と抑圧、従属と不平等に反対し、自主的で平和な、親善的新しい世界を建設するために闘争する、革命的人民の自主偉業である。

自主化が時代の流れとなってはいるが、それを自然の川の流れのように放任しておいてはいけない。

それは今日帝国主義者たちが連合した勢力で、自主化の流れを逆行させようと躍起になっていることと関連する。

こういうところから、世界の進歩的人民は団結した力量で,世界的範囲で自主性を実現するための闘争を能動的に行っていかなければならない。言い換えれば全世界の自主化をめざす闘争を行っていかなければならない。まさにここにあらゆる侵略と戦争を防いで平和と進歩、自主性を実現する真の道がある。

チュチェ思想には、全世界を自主化するうえでのすべての問題が科学的に解明されている。

金正日総書記は次のように述べている。

「自主化された世界は、支配と従属、干渉と圧力のない世界であり、すべての国と民族が自己の運命の主人として自

主権を完全に行使する世界である。」

全世界を自主化するということは、世界のすべての国がいかなる列強や支配主義勢力にも従属されず、服従しないで、徹底的に自主的な道へと進むということである。

全世界の自主化は人類共通の偉業である。

全世界の自主化を実現するには、自分の自主性が蹂躙されることにも反対しなければならないが、人の自主性が蹂躙されることにも反対しなければならない。

隣のうちの火災を放任すれば、自分の家にも火災が移りうるということは、初歩的な理である。

全世界の自主化は、帝国主義、支配主義との闘争を伴う。

帝国主義、支配主義は世界的範囲で起こっているすべての災難と不幸の根源である。

帝国主義、支配主義がある以上、世界は平和でありえず、人民は自由でありえない。

帝国主義者は機会さえあれば他国の内政に干渉しており、時には破廉恥な武力侵攻も躊躇わない。これにより世界の多くの国と民族の自主性が乱暴に蹂躙されている。こういう状況の下で、帝国主義に反対して闘争せずには、人民の志向と念願を決して実現することができない。それゆえ自主の旗を高く掲げて帝国主義に反対してたたかうことにより、全世界の自主化を実現しなければならない。全世界が自主化され

れば、新しい世界戦争を防止して世界に強固な平和と繁栄を実現することができ、すべての国と民族が繁栄する新しい社会を建設して人民大衆の自主性を実現する広い道が開かれるようになる。世界の人々が今日、全世界の自主化を共通の闘争綱領と押し立ててたたかっているのもこのためである。

偉大な自主の思想であるチュチェ思想があるがゆえにあらゆる搾取と抑圧がなく、すべての人々が自由で平和な世界で幸せに生きようという人類の世紀的念願は必ず実現されるであろう。

3）歴史の道は平坦なものでない

この部分では社会的・歴史的運動は人民大衆の創造的運動であるということについてお話しようと思う。

前述の社会的・歴史的運動が人民大衆の自主的な運動だという原理が、社会的・歴史的運動の本質を明らかにしているというなら、社会的・歴史的運動が人民大衆の創造的運動であるという原理は社会的・歴史的運動の性格を解明している。

金正日総書記は次のように述べている。

「社会的・歴史的運動は自然と社会を改造し変革する人民大衆の創造的運動です。」

社会的・歴史的運動が人民大衆の創造的運動であると

いうことは、この運動が人民大衆の創造的活動によって自然と社会を改造、変革し、人民大衆自身を力強い存在に育成する過程であることを意味する。

社会的・歴史的運動は自然と社会を自らの自主的な要求に即して改造していく、人民大衆の創造的活動によって前進する。

自主をめざしていく人類歴史の道は、静寂のたちこもった、もの静かな小道ではない。

うっそうとした樹林があるかと言えば、池や沼、険しい茨の道も少なくない。

この険しい地帯を突破するには、力、力強い手段が必要である。

人民大衆の自主的要求を実現する場合にも同じである。

自然と社会、人間を束縛するすべてのものをなくして自主性を実現する活動は、壮大な活動であり、この活動を成功裏に行っていくためには、創造的活動を行わなければならない。

人民大衆が自己の自主性を実現するためには、創造的活動を行うしかほかに方途はない。

自主性を実現するうえで一番良い方途は、創造である。

人民大衆の創造的活動過程は追い風に帆をつけた船のような場合とは異なり、闘争を伴う。

かつて人民大衆が曲折の多い道を歩まなければならな

かったのは、一言でいって歴史を前進させるための彼らの創造的活動が闘争を伴ったからである。

闘争なしには古いものがなくならず、新しいものの創造がありえない。とりわけ古い社会制度を新しい社会制度に変え、人民大衆の社会的解放を遂げていく過程は、熾烈な階級闘争の過程である。

古い制度、古い勢力を保存しようという勢力は、おのずからその地位を譲るのではない。古い勢力をなくすための闘争を通じてのみ新しい制度、新しい生活を創造することができるのである。

朝鮮での抗日武装闘争の経験がそれを見せている。

朝鮮が去る世紀の初め、日帝の植民地になった後、その解放を渇望して愛国の士は朝鮮の独立に関する請願書を持ってパリへと、ハーグへと奔走しながら絶叫もし、赤手空拳で町にて声の限り万歳も叫んでみたが、与えられたのは監獄や絞首台、血の海だけであった。

このような現象はインドでも現れたが、その代表例がマハトマ・ガンジの非暴力・不服従運動方針ー「サティヤーグラハ」運動方針である。

敵の無慈悲な鉄拳に赤手空拳で抵抗するのは、それこそ狼の前に立っているウサギのようではないか。

暴力には暴力で、武装には武装で、これだけが民族の運命を救う、唯一の方途である。

これは総体的にみて植民地民族解放闘争は平和的方法ではいけず、ひとえに人民大衆の革命的暴力で遂行されなければならないということを見せている。

こうした教訓から朝鮮人民は、偉大な金日成主席の指導のもとに日帝に反対する武装闘争を展開した。

日帝に反対する武装闘争、当時、これは実に大胆な宣言であった。

日帝は爪先まで武装した大軍であるのに、火縄銃もまともにそろえていない状態でどのように対抗していくのか。

しかし朝鮮の革命家たちは確信した。

人民大衆を一つに決起させ、兵士を育て、兵器を揃えて戦えばいくら強敵であっても優に打ち倒すことができるということである。

しかし実際、その戦いは実に困難な闘いであった。

何よりも、勢力対比上雲泥の差をもつ戦いであった。日帝は、抗日遊撃隊を「滄海の一粟」だとも言った。他人はなんと言おうが朝鮮人民は恐れることなく挑戦した。

武装を手にして決死の覚悟でたたかえば、方法も生じ、道も開かれる。

抗日武装闘争の時期の密林の中の兵器廠にたいする話をしようと思う。

その時一部の人は、ソ連の援助で遊撃根拠地に手榴弾工場を建てしようとして当てもないままソ連に要請した。全世

界の共産主義者たちがソ連を人類解放の灯台として仰いでいたときであった。ところがソ連側からはこの要請に何の回答もよこさなかった。要請を受容れると言う約束も、それは困難だとか、不可能だという通知もなかった。このことをおいて金日成主席は、自力更生しなければならないという強い決心を持つようになった。遊撃隊と人民を動員して、自分の力を信じ自力更生で兵器廠をつくり、兵器の製作に必要な工具と火薬を自力で作って保障するようにした。

そのときを回顧して金日成主席は次のように述べている。

「自力更生は…わが国の民族解放闘争史上はじめて、無から有をつくりだす新しい時代を開いた。この生気にみちた時代相は、何事であれ人民の力と知恵を最大限に引き出して切り開いていく共産主義的方法が、いかに正しく有力であるかを実証する生きた絵巻といえる。」

続けて主席は「マルクスとエンゲルスは、人類発展の歴史を階級闘争の歴史だと説いた。それはもちろん正しい規定である。人類の歴史は階級闘争の歴史であると同時に、自己発展の歴史、自己創造の歴史、自己完成の歴史であるともいえる。言いかえれば、人類が自分自身の中に人間特有の力と才能を不断に見いだし、みがきあげてきた創造の歴史であり、同時に人民大衆の自主性をめざす闘争の歴史である。人類の歴史はまた、自らをたえず政治的・思想的に、文化

的・道徳的に、科学・技術的に洗練させてきた革新の歴史であるとも言える。人類はこのような創造と革新の力でいまやロケット時代、コンピューター時代、遺伝子工学の時代、緑の革命の時代を迎えたのである。

…人間が自分の力を啓発させず、天地万物の創造者だという神や天の恩寵にのみ期待をかけてきたとしたら、われわれはまだ旧石器時代に生きているかも知れない。」と述べている。

抗日戦が展開されるにつれて、兵器も増え、経験も積まれて、抗日遊撃隊は決して弱くない武力に成長していった。その存在について日帝は「東洋平和の癌」だと悲鳴を上げ、結局はそれによって滅亡した。

実に多くのことを物語る話である。

自主性を守るためには創造と変革の武器を手にしなければならず、人民大衆がそれを自分の力で獲得しなければならない。

金日成主席の名言でこの部分の話を終えようと思う。

「歴史には強大国が小国に同情し、弱小国の人民に自由と独立をプレゼントした前例などない。民族の自主権はもっぱらその民族自身の主体的な努力と不屈の闘争によってのみ保全し、獲得することができるのである。これは世紀と世代をへて、歴史によって検証された真理である。」

4） 歴史をおし進める偉大な牽引力─自主的な思想・意識

前で人民大衆が主体となっている社会的・歴史的運動の本質と性格が何であるかについてお話した。社会的・歴史的運動は人民大衆の自主性を実現するための運動であり、人民大衆の創造的活動によって行われる運動である。

では人民大衆を社会的・歴史的運動へとおし進める力は何かという問題が提起される。

人民大衆を社会的・歴史的運動へと立ち上がらせ、闘争するように進める力を推進力という。

チュチェの社会・歴史原理は、人民大衆の意識的な闘争によって社会的・歴史的運動が推進されるということについて明らかにしている。

金正日総書記は次のように述べている。

「革命は人民大衆の意識的な闘争によって推進され勝利します。」

人民大衆は自主性を実現するための創造的活動を目的意識的に行っていく。人民大衆の目的意識的な活動によって世界を改造し自分の運命を切り開くための自主的で創造的な活動が推進される。

人工地球衛星の推進力

2012 年 12 月 12 日、朝鮮では平和的人工地球衛星―「光明星―3 号」2 号機が成功裏に打ち上げられた。

朝鮮では1998年8月31日、初の人工地球衛星―「光明星―1号」が打ち上げられ、2009年4月に二番目の人工地球衛星―「光明星 ― 2号」が打ち上げられた。

「光明星 ― 3 号」2 号機の打ち上げによって朝鮮は堂々たる宇宙開発国となり、朝鮮の実用衛星が宇宙を飛ぶようになった。

朝鮮は今後、多くの実用衛星を打ち上げる宇宙強国をめざしている。

今地球の周囲には多くの衛星が回っているが、その数は1 万個にも達するという。その多くの衛星がどうして地球の周囲を回っているのか、その推進力は、果たしてどこにあるのか。

一般的に衛星が宇宙の軌道に進入しようとすれば、初めに強力な推進力、地球引力に対抗できる遠心力を持たなければならない。こうしてこそ定められた宇宙の軌道に入り地球の周りを周期的に回りながら、それぞれの機能、すなわち気象の観測と予報、通信などの機能を果たすことができる。

軌道の形態と高さは運搬ロケットの推進力によって決定される。ロケットの推進力で軌道に進入した衛星は、当該軌道に沿って回りながら自分の機能を果たす。

ここでなにか人工衛星について話すつもりではない。

衛星が自分の軌道に進入して機能をするには推進力が必要であるように、人類の歴史も人民大衆が要求する通りに自主的で創造的な道に沿っていくためには、その道へと進める推進力が必要だということである。

チュチェ思想はその推進力を新しく解明している。

ある外国人との談話

1992 年 3 月 31 日、日本「朝日新聞」編集局長が朝鮮を訪問して提起した質問に、金日成主席は回答を与えた。

その時、編集局長は金日成主席に次のような質問をした。

「遠からずして誕生八十周年をお迎えになる金日成主席は、六十余星霜、朝鮮革命を導き、世界革命に大きな貢献をなされました。その過程でもっとも深く感じた問題はどのようなことでしょうか。」

金日成主席はまず、彼が朝鮮を紹介するよい記事を少なからず掲載してきたことに謝意を表し、次のように述べている。

「ご承知のとおり、わたしは長い期間にわたって、あらゆる従属と束縛を排し自主的に生きようとする人民大衆の願望を実現するためにたたかってきました。その過程で幾多の試練と難関に遭遇し、永遠に忘れられない喜びや悲しみを数多く体験しました。

…

…わたしがいいたいのは、人民大衆の自主性を実現するためにたたかう人は当然、人民の自主的な思想・意識の向上に第一義的な注意を払わなければならないということです。

…

人間の運命を切り開くうえで、客観的条件や環境も重要な作用をするのはもちろんですが、決定的な役割を果たすのはあくまでも人間です。人間が決定的な役割を果たすというのは、つまるところ人間の思想・意識が決定的な役割を果たすということを意味します。往々にして、人間の役割を高めるうえでその創造力を発展させることが重要であることはかなり強調されますが、目に見えない思想・意識がより重要な働きをするということにはさほど注意が向けられていません。人間の創造力も思想・意識によって規制されます。人間が自分の自主的要求に即応して創造的に活動できるのは、自主的な思想・意識をもっているからです。人間の創造力の発展に限界がないように、自主的思想・意識の発展にも限界はありません。」

主席の一生の貴重な経験が含蓄されているこの意味深い教えには、社会の発展を推進する決定的要因がなんであるかが明白に闡明されている。

創造力より目に見えない思想意識がより重要な作用をす

る。そのため人民の自主的な思想・意識を向上させるのに優先的注目を払わなければならない。

では思想・意識が創造力よりなぜ重要であるかについてみることにしよう。

人々は自然と社会を改造する社会的運動を行いながらそれを把握し、改造する能力としての一定の創造的能力を発揮するようになる。しかし人によって、その創造的能力を発揮する方向と程度はそれぞれ異なっている。

同じ創造的能力を持っていても、ある人はそれを最大限発揮するかといえば、ある人はそれを適当に発揮したりする。一方、それを社会的進歩と先進階級の利益のために使う人がいるかとすれば、それを社会の発展を阻害し搾取階級のために使う人もいる。それは、人によって持っている思想・意識が異なっているからである。

思想・意識は人間の要求と利害関係を反映したものであり、科学技術知識で代表される創造的能力は、事物現象の本質と運動法則を把握し、それを活用する能力である。人間の要求と利害関係を反映していることから思想・意識は人々の活動の目的と方向、闘争で発揮される意志と闘争力を規制するようになる。創造的能力はそれを裏打ちするが、それは人間が押し立てた目的と方向、意志と闘争力によって一定の方向で発揮される。

人々が自分のもっている知識と技術を何のために、どの

ように使うかは、全的に人々の思想・意識によって決定される。

原子核が分裂するとき、莫大なエネルギーが放出されるということは、原子という物質そのものの性質を反映した知識であるが、原子エネルギーを電気生産に使うか、でなければ爆弾を作るのに使うかを決心するのは原子エネルギーにたいする人間自身の要求と利害関係を反映した思想なのである

こういうところから思想・意識は創造的能力より自然と社会を変革する人々の活動で重要な役割を果たすというのである。

もちろん人間の活動において知識も重要な推進力として作用するが、それはあくまでも思想・意識の規制の下に人間の活動に影響する。

こういうところから金日成主席は思想・意識がたとえ目には見えないが、創造的能力よりもっと大きな役割を果たすといったのである。

自主的な思想・意識

金正日総書記は次のように述べている。

「**自主的な思想・意識は、人民大衆の自主性をめざす革命運動において決定的な役割を果たします。**」

人類の歴史発展を促す上で決定的役割を果たす思想は、ほかならぬ自主的な思想である。

自主的な思想・意識は、自分の運命の主人としての自覚であり、自分の運命を自らが切り開いていこうという意志である。

自分の運命の主人としての自覚は、自分の運命を支配する存在が自分自身であるという確固たる認識である。

言い換えれば、人間の運命は、神様や王様、そして他の何らかの外部の要因によって左右されるのではなく、人間自身によって支配され決定されるという認識である。

自分の運命を自らが切り開こうという意志は、自分の力で自己の運命をあくまでも切り開いていこうという覚悟と決心である。

言い換えれば、人の力を借りて自分の境遇と運命を開いていこうとするのではなく、自分の力で自己の運命を最後まで切り開いていこうという不屈の精神である。

人民大衆の運命を切り開くための革命闘争で決定的役割を果たすのは、自主的な思想・意識である。

自主的な思想・意識が果たす決定的役割は次のようなところで現れる。

それは何よりも人々をして自然と社会にたいして正しい態度と立場を持ってそれを変革するための闘争に積極的に奮い立つようにするところで現れる。

一つ、実例を挙げてみよう。

かつてワットの蒸気機関が新たに出現したときであった。

蒸気機関は産業革命の端を切るうえで大きな役割を果たした機械であった。資本家たちは、当時、この機械を持って産業を発展させながら、労働者たちの血と汗を過酷に搾り取

った。それで労働者たちは一日に 15 時間以上、骨の折れる労働をしなければならなかった。生産物は以前に比べてはるかに多く生産されたが、彼らには最低賃金にもならないごく少ないものが配られた。労働者たちは「新しい機械が私たちを殺そうとする」といいながら自分たちが苦労しながらも貧しく生きる原因が機械にあると考えた。こうして機械を壊す闘争が行われるようになったが、それがいわゆる労働者階級の「機械打ち壊し運動」であった。

一方、機械を独り占めしていた資本家たちは、政府の力を発動して、「機械を壊す者は死刑に処する」との厳しい法律を公布し、労働者たちを無慈悲に弾圧した。

これを目撃した労働者たちは、機械を壊すことでは自らの生活を改善することができないということを悟り始めた。

労働者たちは機械ではなく、資本家に反対して闘争しなければならないと認識し、労働時間を短縮し、賃金を引き上げることを要求して資本家たちと対抗した。こうして労働者たちは時には労働時間を少し短縮してもらったり、賃金を引き上げることに成功したりもした。しかし、これによって労働者たちの境遇が根本的に改善されたのではなかった。それは資本家たちが政権と生産手段を掌握し、相変わらず労働者たちを抑圧し、搾取していたからであった。

労働者たちは、時間が経つにつれてだんだん自らの境遇を根本的に改善するためには、個別的な資本家ではなく、

資本家階級全体に反対し、資本家階級が依拠している資本主義制度を転覆しなければならないという自主意識で武装するようになり、それに反対する闘争を力強く行うようになった。

こうした歴史的事実は、自主的な思想・意識が人々をして社会と歴史にたいする正しい立場を持って、社会を変革する闘争に奮い立たせることにより、歴史の発展を積極的に進めるということを見せている。

自主的な思想・意識は、また革命運動で発揮される人々の意志と闘争力を規制することを通じて、革命運動を積極的に推進する。

人々がいかに強い意志と闘争力を発揮するかは思想にかかっている。大衆の革命的能力は無尽蔵であるが、思想的に目覚めていなければそれが高度に発揮できない。

思想的に目覚めていない大衆は搾取と抑圧を受けても革命闘争に奮起することができず、革命闘争における小さな難関や試練の前でも屈するようになる。

自主的な思想・意識で武装した大衆だけが革命闘争でしっかりした立場と態度をとることができ、強靭な意志を持って革命闘争に積極的に参加してあらゆる難関と試練を乗り越え最後までたたかうことができる。

思想の強者が多い国—朝鮮

世界に存在する国々はみな、自国固有の自慢を持って

いる。

世界には原油資源の豊かさを誇る国もあれば、広大な領土を誇る国、経済と技術の発展を誇る国もある。

朝鮮は思想の強者が多い国である。

思想活動を優先させることを社会主義偉業遂行の必須の要求として押し立てた朝鮮は、久しい以前から思想活動に優先的な力を払ってきた。

前でも見たように、思想が創造的能力より決定的役割を果たすということは歴史の真理である。

もちろん、情報産業時代に入った今日、コンピューターをはじめ、情報科学技術に精通した科学技術人材をたくさん育成することは、国力を強化するための重要な活動である。

だからといって、思想をないがしろにし、思想活動に優先的関心を払わなければ、手間をかけて育成した人材たちが誰のために、何のために働くかも知らなくなる。こうなれば彼らは、国の富強のために精を出して働くのではなく、自分個人の安楽と享楽だけを追求し、甚だしくは外国を見上げながら国と民族を裏切ることもしかねない。

思想の貧困は政治の貧困と破滅をもたらす。

去る世紀、思想活動を正しく行わなかったため崩壊した旧ソ連と東ヨーロッパ社会主義諸国の実態は、それをはっきりと見せている。

思想を重視し、それに優先的な関心を払ってこそ国が富

強になり、人民大衆の自主性を実現しうるということは、過ぎ去った20世紀の歴史が教えている貴重な教訓である。

朝鮮ではチュチェ思想の旗を高く掲げて前進して来る過程で、多くの思想の強者を育て上げた。

抗日革命闘争や祖国解放戦争時期、社会主義革命と社会主義建設、とりわけ苦難の行軍、強行軍をした去る世紀の90年代に多くの思想の強者たちが輩出された。

思想の強者の大部隊を持っている朝鮮は20世紀に次いで 21 世紀にも帝国主義者のあらゆる挑戦と妨害策動を退けながら、自主の道、先軍の道、社会主義の道に沿って力強く前進しているのである。

人類の社会を明るく照らす
チュチェののろし

著　者：呉星哲
発行所：朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社
発　行：チュチェ103（2014）年 3月

ㄱ-4835012

E-mail:flph@star-co.net.kp
http://www.naenara.com.kp

朝鮮・平壌
チュチェ103（2014）年

ISBN 978-9946-0-1107-3